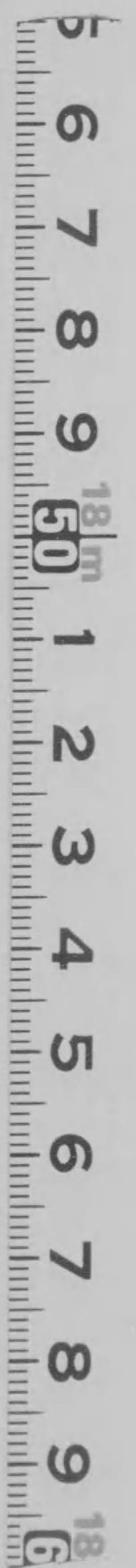


396
358



始



396-358

山
月
集

岡本綺堂著

東京春陽堂版

大正
11. 7. 26
内交

容 内

大坂城	近松門左衛門	小田原陣	城山の月
.....
二七三	二五三	一四一	一

城
山
の
月

登場人物

西郷隆盛 森田金八 濱津彌太 雨倉新七 鮫島彌太郎 平田壯之 谷山盛之 井口守盛 西郷の僕 西郷の妻 濱津の妻

桐野利之 石村賢之次 有馬銀之 飯原勝一 武上源一 坂上宗源 進藤勇 濱津の僕 伊六 出前持六 相良の妹

僧 永山の妹

西のお 照道

鰻屋の女房

西郷隆盛と稱する狂人

ほかに薩軍の兵士、士族の母、妻、娘、小兒、町人、町家の女房、娘など。



この近世史劇四幕は、曩に發表した「西南戦争聞書」六幕の續編である。そのつもりで讀んでください。前編は「西南集」の中に收めてあるから、併せて讀みつけて下されば、更に幸である。

第一幕

(一)

鹿兒島、六日町。鰻屋の店前。正面には狭き暖簾をかけ、その内は沓ぬぎの心。上の方は竹窓。下の方は料理場の體にて繩簾を垂れたり。門口には「うなぎ」と書きたる行燈をかけ、一株の柳が立つ。窓の下には古びたる長床几一脚を置いてあり。

(明治十年九月一日の夕刻。西郷隆盛と稱する狂人は紙にて作りたる陸軍大將の禮帽をかぶり、疊職の物尺を腰にさし、玩具の喇叭を持ちて床几に腰をかけてゐる。鰻屋の亭主音吉は料理場にて溢團扇を持ち、鰻を焼いてゐる。喇叭の音遠くきこゆ。)

狂人。(ひとり言) どうもいかん。あんな喇叭を吹く奴があるものか。喇叭は斯う吹かんぢやいかん。(自分の喇叭を吹く。)

音吉。(料理場より聲をかける) 西郷さん。喇叭がよく鳴るね。

狂人。あたりまへだ。陸軍大將を知らんか。

音吉。(笑ひながら) いや、もう、よく知つてゐますよ。あなたが西郷大將といふことは、鹿兒島の町中で知らない者はありませんよ。

狂人。いくらおれが喇叭を吹いても、けふはまだ一人も降參に来る奴がない。怪しからん奴等だ。もう一度吹いてやらう。(再び喇叭を吹く) それ、見ろ。おれが喇叭を吹いたので、敵の方では止めてしまった。今に大勢がぞろ／＼と繋がつて降參に来るぞ。

音吉。どうかさうなれば可いが……。西郷さん。大丈夫ですかえ。

狂人。大丈夫だ。大丈夫でござす。
(音吉は溢團扇を持つたるまゝ、草履を突っかけて出づ。)

音吉。いくら此の西郷さんが受合つてくれても、さうもむづかしい。ほんたうに忌々しいことだなあ。

(暖簾口より女房お由出づ。)

お由。もし、おまへさん。氣ちがひを相手にして、つまらないことをうつかり饒舌つてゐて、巡査の耳へでも這入ると大變だよ。

音吉。それもさうだが、おれは全く口惜しい。延岡の軍もさうも川はしくないといふ噂だ。

お由。ほんたうに口惜しいことだねえ。

音吉。それ、見ろ。おまへだつて口惜しいだらう。まして俺は男だ。どんなに口惜しいか察してくれ。かうと知つたら、おれも人夫にでもなつて、一所に軍に出ればよかつた。

お由。おまへさんなんぞが一人ぐらゐる出て行つたつて何うなるものかね。鐵砲の撃方も知らないぢやないか。多寡が荷物の一つも擔ぐくらゐること、なんの

役にも立ちやしないよ。

音吉。たとひ荷物を一つ擔いで、西郷様のために働けば可いのだ。(少しく涙ぐむ。)

西郷様はこゝの家を御最負にして下すつたのだ。

お由。まつたくこゝの家を御最負にして下すつて、たびく鰻を食べにいらしつたつげが、もうお目にかゝられないかも知れないねえ。

音吉。なにを云やあがるんだ。縁喜でもないことを云ふな。さうでなくつても武者苦者してゐるところへ、つまらないことを云ふと毆倒すぞ。

狂人。(起ちあがる。)

何だかひどく匂ひがする。敵の死骸を焼いてゐるのか。

お由。(心づく。)

あ、ほんたうに大變。おまへさん、鰻がみんな焦けてしまふつやないか。

音吉。鰻が焦げる。成程さうだ。

(音吉はあわて、料理場へ駈込む。お由もつゞいて行かうとすると、狂人はその腕をつかんで引戻す。)

狂人。 降参しろ。

お由。 え。

狂人。 西郷隆盛に降参しろ。

お由。 はい、はい。降参いたします。

狂人。 弱い奴だ。はムムムム。

(お由は隙を見て、早々に奥へ逃げてゆく。狂人は悠然として再び床几に腰をかける。下の方より出前持六松は萌黄の風呂敷を持ち出て出づ。)

六松。(狂人を見かへる。)やあ、西郷さん。相變らず御出張だな。(料理場の前に来る。)親方、今度はどこです。

音吉。 今度は縣廳だ。

六松。 縣廳はまだ退けないのかね。

音吉。 この頃は又急に忙しくなつたやうで、毎晩夜あかしだと言ふことだ。さあ、すぐに持つて行つてくれ。

六松。 あい、あい。

(六松は蒲焼を入れたる重箱を風呂敷につみみ、上の方へゆきかけて立戻る。)

六松。 もし、親方。西郷さんが歸つて来るといふのはほんたうかね。

音吉。(思はず暖簾から首を出す。)なに、西郷様が歸つて来る。そ、そんなことを何處で聞いた。

六松。 誰が云ひ出したとも無しに、世間ではそんな噂をしてゐるが、まったく西郷さんは歸つて来るのかしら。

音吉。(考へる。)西郷様は日向の方にあるといふことだが、それがどうしてお歸りになるのか。

六松。 やつぱり嘘かね。

音吉。 ほんたうなら可いが……。なにしろ氣をつけて世間の噂を聞いて見ろ。
六松。 あい、あい。(上の方に去る。)

(奥より女中出て来りて、門口の行燈に火を入れる。薄く雨の音。奥より士族濱津應輔、廿七八歳。井口守衛、三十餘歳と連れ立ちて出づ。)

音吉。毎度ありがたうございます。

女中。おゝ、ほつ／＼降つてまゐりました。お傘をお持ちになりませんか。

濱津。いや、傘はいらん。大したことあるまい。

女中。左様でございますか。では、お静かにいらつしやいませ。(挨拶して奥に入る。)

井口。ごうも酔はん。

濱津。今夜はいくら飲んでも不思議に酔はん。

井口。ほかへ行つて飲み直さうか。

濱津。この時節にそんなに飲みあるいては何うもならん。今夜はこれでおとなしく戻らうよ。

(二人は下の方へ行きかゝる。狂人は抜劍の心にて、腰なる竹切をぬき持ち、

二人の前に突つ立つ。)

狂人。西郷隆盛に降参しろ。

濱津。なんぢや。貴様は……。

狂人。西郷隆盛を知らんか。

井口。をかした奴ぢやな。

音吉。(暖簾から覗く。)あゝ、又始めたか。(表へ出る。)もし、旦那様方。それは氣ちがひでございますから、お相手になさいますな。

濱津。むゝ。氣ちがひか。

音吉。それは近所の疊屋で、なか／＼腕のいゝ職人でございましたが、ふだんから西郷様を人一倍に尊敬して居りまして、今度の軍にも是非西郷様に勝たせた、いや、西郷様は屹と勝つものと思ひ込んで居りましたところが、どうもそれが思はしくないと、いふ風聞でございますので、無暗に口惜しがつたり心配したりした揚句の果に、この頃ではだん／＼に氣がをかしくなりました、御覽の通りの

姿すがたをして、おれは陸軍大將西郷隆盛りくぐんたいしやうさいかうたかもりだと云つて、そこらをうろ付ついて居をるのでございます。

濱津。西郷先生さいかうせんせいを尊敬そんけいのあまりに、軍の模様いくさのようを心配しんぱいして、氣が狂くるふたと云ふんぢやな。井口。可愛かあいい奴やつぢやないか。

井口。可愛かあいくもあり、可哀かあいさうでもある。つまりは我々われらとおなじ仲間なかまぢや。(狂人きやうじんに。)まあ、安心あんしんせい。西郷先生さいかうせんせいは屹きつと勝かつぞ。

狂人。西郷隆盛さいかうたかもりに降参かうさんしろ。濱津。むゝ、降参かうさんする。西郷先生さいかうせんせいが戻もつて來くれば屹きつと降参かうさんする。それまではおとなしくしてゐろ。

音吉。(小聲ここゑで。)旦那様だんなさまが戻もつていらつしやると云ふのはほんたうでございませうか。

濱津。(叱しかるやうに。)そんなこと無暗むやみに云ふぢやいかん。東京とうきやうの兵隊へいたいや巡查じゆんさに聞きかれたら何なにうするか。

音吉。はい。

(非常ひじやう喇叭らっぱの音おときこゆ。)

井口。や、あの喇叭らっぱはなんぢや。

濱津。いつもとは違ちがふぞ。

(喇叭らっぱの音おとつゞけて聞きゆ。狂人きやうじんは俄にわかに眼めをかどやかせて空そらを仰あやぐ。)

狂人。おゝ、喇叭らっぱが鳴なる、喇叭らっぱが鳴なる。西郷隆盛さいかうたかもりはこれから城山しろやまへ行くぞ。進すす軍ぐん。

(狂人きやうじんは片手かたてに竹切たけきりを持ち、片手かたてに喇叭らっぱを吹ふきながら、傲然がうぜんとして上かみの方かたへ立去たちきる。三人さんにんはあとを見送みおくる。)

井口。氣きちがひの云いふことも馬鹿ばかにはならん。あいつ、城山しろやまへ行くいと云いうて居をつたぞ。

濱津。むゝ。城山しろやまへ……。

(二人ふたりは顔かほを見あはせる。喇叭らっぱの音おと。奥おくよりお由よしと女中ぢようちゆう出いづ。)

……城山しろやまの月……

お由。なんでせうね。あの喇叭の音は……。

女中。何事か起つたのでせうか。

濱津。どうもをかしい。

井口。いよ／＼唯事ではないらしいぞ。

(二人はうなづき合ひて、そのまゝ足早に上の方へ去る。雨の音喇叭の音)

音吉。おゝ、雨が強くなつて来た。さう考へてもこりやあ唯事でない。おれも
行つて見て来よう。

お由。(引き止める。)おまへさん、どこへ行くんだよ。

音吉。どこと云ふ的もないが、まあ其處らへ行つて見たら判るだらう。何、濕

れたつて構ふものか。

(音吉は尻を端折りて、下の方へ走りゆく。)

女中。おかみさん。なんだか怖いやうですね。

お由。ほんたうに忌だねえ。又こゝで軍でも始まるんぢやないかしら。

(上の方より町人三人出づ。)

町人一。なんだらう。陸軍のあの喇叭は……。

町人二。何が始まつたのだらう。

町人三。行つて見ろ、行つて見ろ。

(三人はあわたゞしく下の方へ走り去る。雨の音。お由と女中は軒下に立ち
て不安らしく眺めてゐる。下の方より町人二人、町家の女房、娘など走り出
づ。)

女房。もし、どつちの方へ行つて見たら可いのでせうね。

娘。大勢があつちへも此方へも駈けて行くので、些とも見當が付きません。

(人々はうろ／＼してゐると、上の方より町人四五人走り出づ。)

町人四。どつちだか判らないが、まあ兎もかくも川岸の方へ行つて見ろ。

町人一同。さうだ、さうだ。

(町人等は下の方へ走りゆく。)

女房。わたし達はあつちから来たのだが、別に變つたところも無かつたらしい。

町人五。ひよつとすると火事かも知れない。

女房。火事なら紅く見えさうなものですかね。

町人六。それもさうだ。何しろまあ縣廳の方へ行つて見よう。

(町人二人と女房、娘等は上の方へ走りゆく。向ふより薩軍の兵士三人、破れたる軍服の上に桐油を着たるもあり。單衣の尻からけにて米俵を着たるもあり。軍服の上に簑を着たるもあり。いづれも笠をかぶり、或は手拭をかぶりて足早に出づ。この三人が店の前を通り過ぎる時、お由は思はず進み出て覗かうとする。)

兵士一。(嚇すやうに)斬るぞ。

(お由と女中はぎよつとしてあとへ退る。兵士等はそのまま上の方へ急ぎゆく。お由等は内へ逃げ込み、暖簾の間より表を覗いてゐる。向ふより同じく薩軍の兵士二人出で、前後をうかどひながら上の方へ走り去る。喇叭の音つ

とけてきこゆ。

向ふより森田金八郎は破れたる軍服の上に車夫の赤毛布をまとひ、汚れたる軍帽をかぶり、脚絆草鞋、大小にて、車夫の饅頭笠をかざしながら急ぎ出で、店の前を行き過ぎやうとして見かへる。)

森田。お、うなぎ屋か。これ、誰か居らんか。

お由。(おどくしながら)はい。

森田。お、お前か。森田ぢや、水をくれ。

お由。(表へ出て覗く)お、森田様でございましたか。(女中に)早くお冷水を

……
(女中は奥に入る。)

お由。いつお歸りでございました。

森田。たつた今歸つたばかりぢや。

お由。左様でございましたか。

森田。 鹿兒島に敵軍は澤山居るか。

お由。 よくは存じませんが、海軍と陸軍と警察の人達で四五百人はゐるやうでございませぬ。

森田。 その位か。(打笑む。)

(女中は茶碗に水を汲んで出づれば、森田はうけ取りて飲む。)

お由。(小聲で。)あの、西郷様もお歸りでございますか。

森田。 そんなことは判らん。

(森田は水を飲んでゐる。下の方より音吉走り出づ。)

音吉。 大變だ、大變だ。また軍が始まるらしい。(云ひながら森田を見る。)

森田の旦那様ではございせんか。

森田。 むむ、森田ぢや。久振りぢやつたな。

音吉。 先づは御無事でおめでたうございました。

森田。 あまり目出たうもないが、兎もかくも歸つて來た。(茶碗を女中に返す。)

どうで知るゝことではあるが、こゝでおれを見たことを誰にも云ふなよ。

(云ひ捨てゝ森田は上の方へ行きかゝるを、音吉は呼びとめる。)

音吉。 森田様。

森田。 なんぢや。

音吉。 あの、西郷様はお歸りになりませんか。

森田。 そんなことは判らんと云ふに……。それを聞いてどうするか。

音吉。 わたくしもお出迎ひにまゐりたうございます。

森田。 いや、來るには及ばんよ。

音吉。 では、桐野様はお歸りになりますか。

森田。 そんなことはあこで判る。うるさく詮議するな。

(森田は上の方に去る。三人はあとを見送る。)

お由。 さつきから學校の人達らしいのが四五人通りましたよ。

音吉。 さうか。(考へる。)

……城山の月……

(向ふより有馬銀之助、軍服の上に米俵を着て走り出で、店の前にてつまづき倒れる。音吉は立寄つて引き起す。)

音吉。 おゝ、有馬さんではございませんか。

有馬。 おゝ、うなぎ屋か。

音吉。 西郷様はお歸りになりましたか。

有馬。 知らん、知らん。

(有馬は音吉を突き退けて上の方へ走り去る。)

音吉。 むゝ、判つた。みんなが斯うして歸る以上は、西郷さまも屹とお歸りなすつたに相違ない。西郷様を置去りにして、あの人達ばかりが歸つて来る筈がない。おい、お由しつかりしにやあならないぞ。

お由。 西郷様はほんたうにお歸りになつたのかねえ。

音吉。 屹とお歸りになつたに相違ない。ありがたい、ありがたい。(跳り上つて喜ぶ。)さあ、大變だ。どうしたらよからう。(うろくして。)やい、やい、何をほ

いやりしてゐるのだ。これから總がゝりで鰻を焼け。西郷様は鰻が大のお好きで、ふだんから俺を御最負にして下すつたのだ。

(音吉は鉢巻をする。上の方より六松は風呂敷を持ちて走り出づ。)

六松。 親方。西郷さんはいよくお歸りになるといふ噂ですぜ。

音吉。 さあ、六。おまへも手傳つて鰻を焼け。それが西郷様には何よりの御馳

走だ。

六松。 なるたけ荒い方がよからうな。

音吉。 西郷様ばかりぢやない。ほかの方達も一所に歸つて来るに相違ないから、あつたけの鰻をみんな焼いてしまへ。

六松。 甲突川へ行つて捕つて来ようか。

音吉。 馬鹿をいへ。これから釣りに行つて間に合ふものか。(料理場を指さす。)

六松。 表で割くのかえ。

音吉。なんでも好いから早くしろ。

(六松は料理場へ入りて、鰻箆をかゝへ出さうとする時、小銃の音二三發つどけて聞ゆ。)

六松。あ、鐵砲だ。

(六松は思はず持つたる箆を取落せば、鰻はそこらに散亂して蛭りまはる。)

音吉。え、弱蟲め。しつかりしろ。

(音吉と六松は地に落ちたる鰻を拾ひあつめる。お由と女中は不安らしくあたりを見廻してゐる。小銃の音つどけて聞ゆ。雨の音。)

下の方より士族の妻、娘、それに町人もまじりて十五六人。「西郷さんが歸つた、西郷さんがお歸りだ。」と語り合ひながら上の方へ走りゆく。)

(11)

鹿兒島、私學校の門前。少しく上の方によせて學校の門、左右は石垣の上に石塀をめぐらし、門内には學校の建物、立木など見ゆ。建物のうしろには城山高く聳ゆ。

(おなじ夜。塀の外には幾ヶ所も小銃を組み、薩軍の兵士廿餘人が休息してゐる。兵士の服装は一致せず、破れたる軍服を着たるもあり、單衣の尻端折りもあり。糸立などを着たるもあり。桐油を地に敷きて休息するもあり。小銃の音をりくりに聞ゆ。門内より雨倉彌太郎、鮫島新七は泥まぶれの軍服、大小にて出づ。)

雨倉。やあ、みなも御苦勞ぢやつた。

鮫島。朝から息のつくかぎり走り通したので、おたがひに草臥れましたなう。

一同。草臥れた、草臥れた。

雨倉。われくがこれほご早う乗込んで来ようとは、敵も流石に心付かんぢやつたらう。

鮫島。なにしろ不意を襲はにやいかんと云ふので、朝からおよそ十五六里も走りました。

雨倉。その代りに味方の作戦は圖にあたつて、敵はよもやと油断してをるところへ、不意に乗込んだのは愉快ぢやつたよ。

鮫島。さうでござはした。先づこの私學校を占領せいと云うて、われ／＼世人あまりが表門から斬込むと、敵はおどろいて無暗に撃ち居つたが、一時間とは持ち堪えられんで、たうとう退却し居つた。

(門内より飯原勝彌出づ。)

飯原。さうぢや、鮫島。愉快ぢやなう。

鮫島。久振りて故郷へ歸つて、生返つたやうな心持がするなう。これもみな先生のお蔭ぢや。日向の長井で戦死してしまふたら、斯うしてこゝへは歸つて來られん筈ぢや。

飯原。若い者どもの頼みを背いて、先生が快く戻つて下されたので、われ／＼

も斯うして故郷の土を踏まれたのぢや。

兵士一同。まつたくぢや、まつたくぢや。

雨倉。それにしても城山はさうしたかなう。鐵砲の音があまり聞えんぢやないか。

兵士一同。さうぢやなう。

(人々はうしろを仰ぎ視る。門内より西郷隆盛、そのあとに石村賢次郎と従卒二人付き添うて出づ。)

西郷。雨は小降りになつたやうぢやな。

石村。やがて止むでございませう。

(人々は西郷を見て敬禮す。)

西郷。まづ兎もかくも故郷へ歸つて來た。可愛嶽の圍みを衝いて出たのは八月十七日の夜で、けふは九月の朔日、丁度半月目で無事に鹿兒島まで歸りついたが、もう日が暮れたので城山も見えん。あすの朝になつたらはつきりと見ゆるぢやら

う。

一同。さうでござせう。

(西郷を始め、人々はうしろを仰ぎ視る。)

西郷。鐵砲の音が聞えんやうぢやなう。

雨倉。今もその噂をしてゐたところではす。

石村。味方がもう占領したのではございますまいか。

西郷。それなら報告がありさうなものぢやが……。なにをして居るかなう。

(小銃の音つゞけて聞ゆ。)

西郷。おゝ、まだ遣つちよるな。敵の兵力は餘ほど多いか。(考へる。)

石村。わたくし行つて見てまゐりませうか。

西郷。まあ、可い。やがて何とか報告が来るぢやらう。

(小銃の音。向ふより濱津應輔は短き袴、脚絆、草鞋にて大小をさし、ほかに五六本の大小を薦につゝみて抱へて出づ。)

鮫島。(つか／＼と進み出づ。誰ぢや。

濱津。(透し視る。西郷先生はおいでとごはすか。

鮫島。お名乗りなさい。

濱津。濱津應輔。

鮫島。おゝ、濱津さんでござしたか。先生、濱津さんが見えました。

西郷。おゝ、濱津さん。西郷はこゝに居ります。

濱津。先生。(進みよる。お久振りではした。御機嫌よろしうお歸りなされ

て、お目出たうごはす。(敬禮する。)

西郷。目出たうもごはせんが、生きて再び戻つて來ました。二月の出發の時に

は、あんたは病氣ぢつたが、もうすつかり好うごはすか。

濱津。おかげで五月頃から起きられるやうになりました。

西郷。それは結構ぢやつた。井口さんも病氣ぢやつたが、さうしましたか。

濱津。井口もその後全快しまして、實は今夜も音吉のところで一所に飲んでを

りました。

西 郷。 音吉……。ほう、うなぎ屋でござはすか。あの亭主も元氣で居りますか。

濱 津。 相變らず元氣でをります。(一同に。)やあ、皆さん。御苦勞でござはした。

お察し申します。

(人々は答禮す。)

濱 津。 ところで、先生。わたしはあんたに御詫に出来ました。

西 郷。 どんなことですか。

濱 津。 この二月出陣の節には、あんたも御承知の通り、井口もわたしも生憎に病氣でござはして、残念ながらお供することが出来ませんで、何とも申譯がござはせんでした。その中に敵軍が鹿兒島に乗込んで来て、出口出口を嚴重に監視して居るので、どうすることも出来ません。よんどころなく歸順と見せかけて、今日まで窃かに機會をうかどうて居りますと、思ひがけなく今夜あんた方が歸つて來られたので、すぐに御詫ながら駈付けてまゐりました。

西 郷。(打笑む。)いや、ありがたうござはす。陣中でもたびく、あんたの噂をして居りました。あんた達が病氣のために、この鹿兒島に残つて居られたのが、今となつては却つて好都合でござはした。われくが出たあとの鹿兒島の様子などは、あんた達に聞かして貰はにや判らん。早速にたづねて来て下されて、重々ありがたうござはした。奥さんにもお變りはござはせんか。

濱 津。 家内も達者で暮して居ります。いづれこゝへまゐるでござはせう。

西 郷。 さうでござはすか。やあ、濱津さん。委しいことはだんくにお話し申すが、今度は若い者どもにえらく働いて貰ひましたよ。

濱 津。 日向をお立ちになつたのは、先月の何日頃でござはしたか。

西 郷。 先月の十七日でござはした。われくは袋の鼠、もう所詮いかんと覺悟したのでござはすか、桐野や森田にも勧められ、こゝに居る若い者どもにも取りまかれて、可愛嶽の方面から敵の圍み突き破つて、星一つ見えない闇の夜に山越えをして先づ三田井に出ました。路は悪し、ゆく先々には敵が居る。いや、なかく

難儀でござしたよ。それでも無理無體に突き進んで、半月がかりで何うにか斯うにか無事に戻つて来ました。(云ひかけて聲を陰らせる。) いや、無事でもござせん。わたしや桐野や森田、重立つた者どもは幸ひに無事でござしたが、こゝまで来る途中で若い者ども百人あまりも見えなくなつてしまひました。戦死したのもござせう、生捕られたのもござせう、路で失れたのもござせう。折角故郷を見せ遣らうと思つて違立つて来たのでござすが、まことに残念なことでござした。濱津さん、察してください。

濱津。お察し申します。

(門内より桐野利秋は從卒二人に火繩を持たせ、兵士五六人を連れて出づ。)

桐野。暗うて好う判らんが、聞いたやうな聲ぢやな。

西郷。濱津さんぢや。

桐野。おゝ、濱津さんか。好うたづねて下された。われくも先づ無事に戻つて来ました。

濱津。おめでたうござした。

桐野。そこで早速ぢやが、この鹿兒島近郷から大隅にかけて、新に兵士や人夫を募集する見込がござせうか。

濱津。この見込が無いでもござせん。色々の事情で御一所に出られんで、我々同様によんどころなく歸順を粧うて居る者が、この鹿兒島にも五六十人はあります。それらが手分けをして近國近郷の士族どもを募集したら、先づ千人ぐらゐは集められませう。人夫などは何うにでもなります。

桐野。ほう、千人……。その位あつまれば又こゝで一仕事出来ます。こゝに居る敵軍どもを追ひ攘つて、先づ先全に鹿兒島を占領してしまつて、今度は更に長崎方面へ突出します。濱津さん、あんたの御意見はどうぢや。

濱津。なるほどそれも好うござせう。

桐野。ようござはすか。わたしも途中から然う考へて来ました。

濱津。して、差當りはどうなさる。この學校と城山を根據地にする積りでござ

すか。

桐野。 さうでござはす。あんたの屋敷の御近所ぢや。よろしうたのみますぞ。(笑ふ。)

濱津。 勿論でござはす。就ては何かのお役にも立たうかと思つて、家に貯へてある大小を五六本かゝへ出して來ました。

西郷。 それはありがたうござはした。何しろ無茶苦茶に遣り居るので、刀を叩き折つたのもあり、鞘ぐるめに落してしまふたのもあります。(兵士等を見かへる。)
そこらにも刀のない者があるぢやらう。お禮云うて濱津さんに貰へ。

兵士一同。 ありがたうござはす。

(兵士の四五人は起つて濱津の薦包みをうけ取り、その大小を分配してゐる。)

小銃の音きこゆ。

西郷。 まだ遣つちよるか。

桐野。 埒が明かなう。

(人々はうしろを見かへる。向ふより濱津の妻お秀、廿二三歳、片手に泡盛の徳利を持ち、片手に火繩を振りて出づ。あこより濱津の僕伊八が握り飯を入れたる籠を背負ひて出づ。)

お秀。 皆様、お歸りでございましたか。

西郷。 おゝ、濱津の奥さん。いや、さんぐの體で戻つて來ました。(笑ふ。)

お秀。 御無事でおめでたうございました。

桐野。 ありがたうござはす。

(一同も會釋する。)

お秀。 就きましては、何分不意のことでございますので、仕度をいたして居る暇もございませぬ。おめづらしくもございますまいが、琉球の泡盛を少々ばかり持參いたしました。さうぞ一口づつ召上つて頂きたう存じます。

西郷。 琉球の泡盛、やあ、それは結構ぢや。わたしも一杯御馳走になつて、あとは皆に分けて遣ります。

濱津。握り飯はごうした。

お秀。それも持たせてまゐりました。

(お秀は伊八に指圖して、握り飯の籠を卸させる。)

西郷。やあ、色々の御馳走ぢや。ありがたうごはす。皆も腹が減へとるぢやら

う。すぐに頂戴したら何うか。

桐野。まつたく誰も彼も腹が減つて居る。奥へ持つて行つて遠慮無しに食へ。

兵士一同。(喜ぶ。)ありがたうごはす。

桐野。西郷さん。あんたも何うですか。

西郷。わしも其の泡盛を御馳走にならうかな。濱津さん。あんたにはまだ色々

お聞き申したいこともある。酒飲みながらゆるく話しませう。

(西郷は先に立つて門内に入る。從卒二人も附いてゆく。濱津夫婦と伊八もついでに入る。他の兵士等も行かうとする。)

桐野。あ、待て。なんほ食物が來たと云うて、一度に皆行つてしまつてはいか

ん。

兵士一同。はあ。

桐野。幾人が交代でこゝに張番せにやならんぞ。

石村。では、わたくしがこゝに残つて居ります。

雨倉。わたくしも居ります。

飯原。鮫島。われくも居ります。

桐野。よろしい。では、四人に頼むぞ。

四人。はあ。

(桐野は從卒の火繩を石村と雨倉に渡して門内に入る。他の兵士等は四人に「頼むぞ、頼むぞ。」と云ひ捨て、皆打連れて門内に入る。)

石村。濱津さんは相變らず親切な人だな。

鮫島。我々が鹿兒島へ歸つたら、あの人が屹と一番先に駈付けて來ると云うて

居つたが、案の通りぢや。

飯原。御主人は大小を持つて来る。奥さんは泡盛と握り飯を運んで来る。何か
ら何まで行きとどいたもんぢや。

雨倉。濱津さんの話の様子では、我々も力を落すことはない。まだ一仕事出来
さうぢやぞ。

石村。それにしても、城山の方はひつそりしてゐる。敵はもう退却したのか知
らん。

(下の方より有馬銀之助走り出づ。)

四人。誰ぢや。

有馬。(勇んで。)大勝利ぢや。城山の敵はみな退却して、味方が確實に占領して
しまふたぞ。

四人。(よろこぶ。)さうか、さうか。早う行つて報告しろ。

(有馬は門内に走り入る。)

雨倉。たうとう遣付けたな。

(四人は愉快さうに城山の方を見あける。向ふより井口守衛も身軽に扮装
矢はり薦包みの大小五六本をかゝへて出づ。)

四人。誰ぢや。

井口。井口守衛でござす。

四人。あゝ、井口さんか。

井口。西郷先生はお歸りでござすか。

石村。先生は奥にお在になります。濱津さんも今お見えになりました。

井口。濱津さん既う来たか。早いなう。では、御めん下さい。

(井口は門内に入る。)

飯原。あの人も何か抱へて来た。

絞島。やつぱり大小らしいぞ。

雨倉。さうでも故郷は懐しい。識つた人達がごんぐにたづねて来てくれるわ。
おれの阿母さんも早う来てくれんかなう。

……城山の月……

飯原。 まつたく故郷へ歸つてよかつた。妹や弟は何をして居るか。

鮫島。 おれのおばあさんは年寄つても丈夫ぢやから、一番先に來てくれる筈ぢやがなう。

(上方より鰻屋音吉は六松に大きい重箱を脊負はせて出づ。)

音吉。 さあ、早く行け、早く行け。

六松。 あい、あい。

(二人は門前に走り來る。)

四人。 誰ぢや。

音吉。 はい、はい。うなぎ屋でございます。

石村。 なに、鰻屋……。(火繩を差付ける。何しに來た。)

音吉。 あなたは石村さんではございませんか。お馴染の音吉をそんなに嚇かしてはいけませんよ。

石村。 あゝ、鰻屋の亭主か。(笑ひながら三人を見かへる。諸君、うなぎ屋の亭

主が來た。

雨倉。 いろくの人が來るなう。

飯原。 おい、うなぎ屋。この頃はどうかぢや。

鮫島。 相變らず高い鰻を賣つて、暴利を貪つて居るんぢやらう。

音吉。 冗談云つちやいけません。戦争以來すっかり不景氣になつてしまひました。

雨倉。 嘘をつくと毆るぞ。

四人。 はムムムム。

音吉。 そこで、皆さん。西郷様はお歸りになつたのでございませうね。

石村。 お歸りになれば何うするのだ。

音吉。 まあ、待つて下さい。あなたはおとなしい癖に理窟を云つていけない。西郷様が吃とお歸りになつてゐると思ひまして、お好きな鰻を澤山に焼いて來たのでございます。

石村。むゝ。鰻を焼いて来たのか。よく気がついた。褒めて遣るぞ。すぐに先生に差上げるから、早く出せ。

三人。出せ、出せ。

(三人は重箱を取りにかゝる。)

六松。いけません、いけません。

音吉。あなた方にうっかり渡したら、肝腎の先生のお目にかけるまでに、途中

でみんな無くなつてしまひませう。

六松。あなた方があばれ食ひの御手際は、わたくし共もよく知つてゐます。

石村。貴様達こそ理窟をいふ奴等だ。なんでも可いから早く出せ。

六松。いけません、いけません。

雨倉。仕様のない奴だな。

飯原。鮫島。勝手に行け、行け。

二人。はい、はい。

(音吉と六松は早々に門内に入らうとする。)

雨倉。いや、待て。勝手に入れては我々の役目が立たん。おれが案内してやる。

(雨倉は先に立ち、音吉と六松とを門内へ連れてゆく。)

石村。城山を確實に占領してしまへば、もう安心だ。

飯原。まつたく安心ぢや。

鮫島。今夜は久振りのでゆつくり寝られるぢやらう。おばあさん、まだ来んかなう。

(門内より雨倉は引返して出づ。)

雨倉。おい、おい。早う来んと、食ふ物がみんな無くなつてしまふぞ。

飯原。鮫島。そりやいかんな。

石村。併しこゝを打捨つても行かれまい。

雨倉。城山を占領してしまふたら、些との間ぐらゐは張番せんでもよからうぢやないか。

石村。それもさうだが、一人もこゝに居らんで悪からうぞ。

飯原。鮫島。まあ、可い。行かう、行かう。

(飯原と鮫島は雨倉と共に入内に入る。石村一人は矢はり門外にたゝすんでゐる。蛙の聲きこゆ。)

石村。(闇を透して俄に叫ぶ。)あ、お弓さん……。は、馬鹿な。お弓さんの来る筈がない。いや、たしかに見えたが……。

(石村は夢のやうに考へてゐる。下の方より森田金八郎は兵士三人を連れて足早に出づ。)

森田。どうも暗うていかな。そこに居るのは誰ぢや。

石村。(火繩にて透し視る。)森田先生ですか。

森田。む、石村か。有馬をさつき遣したに、まだ來んか。

石村。有馬君は疾うにまゐりました。

森田。さうぢやらう、疾うに來て居る筈ぢや。敵兵を追ひ拂うて、城山を確實

に占領しましたから、西郷先生に早う御引移りを願ひますと云うて遣した筈ぢや。

石村。そこまではよく知りませんが、城山を占領した事だけは承知してゐます。

森田。貴公は知らんでも、有馬が報告した筈ぢや。

石村。西郷先生はすぐに御引移りになるのでございませうか。

森田。(焦れる。)判つとるぢやないか。この學校と城山を占領したからと云うて、鹿兒島の敵を全部追ひ拂ふたといふ譯ぢやない。敵の海軍も陸軍も警察官も諸方に駐屯して居る。それらが一度に逆襲して來たら何うするか。こんなところで防げるか。それぢやから我々も苦心して、眞先に城山を乗取つたんぢやないか。餘の者は兎も角も、西郷先生だけは一刻も早う城山へ連れて行かにやいかん。桐野もそばに附いて居りながら、悠長に何をしちよるかなう。

石村。判りました。では、かさねて御催促いたしてまゐりませう。
(石村は門内に入る。)

森田。いや、あいつ等は何を云ふか判らん。おれが行つて来よう。

(森田は門に入らうとする時、うしろにて銃聲きこゆ。森田は立戻る。)

森田。なんぢや。敵は全部追ひ拂ふた筈ぢやが……。 (うしろを見る。) まだ残兵が何處にか潜伏してをると見ゆるな。

(門内より有馬銀之助出づ。)

森田。誰ぢや。

有馬。森田先生でござるか。

森田。西郷先生はごうしたか。

有馬。先生はすぐにおいでになります。

森田。さうか。今の鐵砲の音は何ぢやらう。早う行つて見にやならん。

(森田は有馬と兵士を連れて、足早に引返して去る。蛙の聲きこゆ。門内より濱津の妻お秀は伊八を連れて出で、思ひありけに門内を見かへりながら行きかゝる時、門内より濱津應輔出づ。)

濱津。(呼びとめる。)これ、秀。

お秀。はい。(立戻る。)

濱津。家を出る時は取急いたので好う云はんぢやつたが、あとのことを頼むぞ。

お秀。このまゝお歸りにはなりませんか。

濱津。この通り仕度して出て来たのぢや。二度ミ歸らぬ決心は判つて居るぢや

らうが……。

お秀。はい。

濱津。わしは今夜の來るのを待つてゐたのぢや。西郷さんが戻られた以上、わしは何うでも先生と生死を共にせにやならん。たとひ近所に住んで居つても、もう再び逢はれんかも知れんから、その積りで居つてくれ。えゝ、泣いちやいかん。女子でも薩摩の者がそんなに弱いことぢやいかん。

お秀。はい。では、これでお暇申します。

濱津。夜の更けん間に早う歸れ。伊八にもあとを頼むぞ。

伊八。 かしこまりました。

濱津。 さあ、行け。

お秀。 はい。

濱津。 何をぐづくしちよるか。判らん奴ぢやなう。

唄 『門内にて兵士等の歌ふ聲きこゆ。』
唄 『兒が前髪切らしやるならば、わしも留めませ振袖を。』

(夫婦は黙して其唄を聴いてゐる。門内より西郷隆盛は從卒二人に火繩を持
たせて出づ。)

西郷。 (透し視る。)濱津さんぢやごはせんか。

濱津。 はい。

(夫婦はあわてゝ離れる。)

濱津。 して、これからどこへ……

西郷。 すぐに城山へ行きます。

濱津。 城山へおいでになりますか。

(この中に、お秀と伊八は窃と行きかゝる。西郷は從卒の火繩を把りて、し
づかに振りながら向ふを透して視る。お秀と伊八は足早に向ふへ立去る。西
郷はそれを覺りて、氣の毒さうに嘆息す。上の方より士族の母、妻、娘、子
供なご十四五人急ぎ出づ。)

濱津。 誰ぢや、誰ぢや。

一同。 (口々に。)西郷先生はお歸りでござりますか。

西郷。 おゝ、西郷は戻りました。

一同。 先生。おめでたうござります。(敬禮する。)

西郷。 ありがたうごはす。(苦しさに。)あんた方の家の者も無事に戻つて居る
のがあるかも知れん。兎もかくも行つて御覽なさい。

一同。 這入つても宜しうござりますか。

西郷。 構ひません。遠慮なしにお這入りなさい。

一同。では、御めん下さい。御免ください。

(人々は叮嚀に會釋して門内に入る。)

西郷。わしはあの人達にあはせる顔がない。(嘆息する。)濱津さん。江東の子弟八千人、今一人の還る無しぢや。

濱津。(考へる。)その項羽が烏江でほろびたのは過ぎまつて居るといふ議論もごはす。たしか杜牧の詩でござした。江東の子弟才俊多し、卷土重來いまだ知るべからず。

西郷。それは詩人の議論でござすよ。いや、こんなこと云うてをる間に、早う奥へ行つて、今の人達にあらためて挨拶せにやららん。

(西郷は急いで門内に入る。濱津は西郷に同情するやうに嘆息しつゝ、これも門内に入る。うすく雨の音。上の方より西郷隆盛と稱する狂人、傲然として出て來り、正面にむかひて得意らしく喇叭を吹く。幕。)

第二幕

(一)

岩崎谷、濱津應輔の屋敷。士族なれども舊藩以來の門閥家とて、家の作り卑からず。二重家體の正面、上の方によせて床の間あり。つゞいて出入の襖あり。家の周圍は竹藪にて、庭には桐の木あり、柿の木五六本あり。戰爭以來手入れをせぬと見えて、秋草一面に生ひしけりて色々の花咲けり。

(九月中旬の午後。座敷の内には白木綿を澤山取り散して、濱津の妻お秀が筒袖の單衣を縫つてゐる。相良の妹お雪、永山の妹お道、ほかに士族の娘三人、いづれも忙しさに單衣を縫ひ、或は繻帶を作つてゐる。濱津の僕伊八は庭に出て、やゝ黄ばみたる柿の實を落してゐる。小銃の音をりくに聞

……城山の月……

(ゆ。)

お 秀。 みなさん、よく御精が出ますね。

お 雪。 何分にも不器用でございますので、朝から一生懸命に針を動かして居りまして、まだ二枚とは仕上がらない。

お 道。 朝夕はめつきり冷えてまゐりましたが、斯うして働いて居りますと、汗が滲んでまゐります。(袂にて額の汗を拭く。)

お 秀。 ほんに日の中は残暑がなかく、強うございます。

伊 八。 奥さん。柿はこの位でよろしうございませうか。(籠を指さす。)

お 秀。 時候がまだ早い上に、熱した分からだんくに取つてしまふので、青いのばかり残つてゐます。それでも無いよりは優であらうから、日が暮れたら運んで行つてあけるがよい。

お 雪。 山には幾らも木の實がありますけれど、うつかり出て行くと敵に狙撃されるので、どなたも不自由してゐられるとのことでございます。

伊 八。 まつたく油断は出来ません。敵は四方から無暗に撃ち出すのですから、鐵砲玉はどこから飛んで来るか判りませんよ。

お 秀。 ほんに御不自由なことであらう。斯うと知つたら、食物や何かもつと澤山貯へて置かうものを、残念なことをしました。

(小銃の音きこゆ。)

伊 八。 あゝ、又撃ち出したか。皆さん、氣をおつけなさらないと危なうございませよ。

(お秀は縁に出る。)

お 秀。 家のまはりには竹藪がありますから、外へさへ出なければ大丈夫でせう。(下の方より有馬銀之助、破れたるシャツとズボンだけにて刀を脊負ひ、跣足にて出づ。)

有 馬。 奥さん。今日は……。

……城山の月……

お秀。 おゝ、有馬さん。明るい中によくお出かけでございました。

有馬。 (笑ふ。) いや、この頃はもう平氣でございますよ。敵の奴め、無茶苦茶に撃ち居るんぢやから、彈を恐れてゐたら一足も外へは出られんのでございます。

お秀。 それでも成るべく氣をおつけなさるが宜しうございます。

有馬。 はあ。(うなづく。) そこで、奥さん。わたしの着物が出来ましたか。

お秀。 はい。もう出来て居ります。

有馬。 ごうも此の姿では、夜が冷えて叶はん。(笑ふ。)

お秀。 お察し申します。なにしろ急場のことでございますから、こんなもので

御辛抱をねがひます。

(お秀は床の間に積みかさねたる白木綿の單衣を一枚持出して来る。)

お秀。 あなたのはたしかこれでございました。手を通して御覽ください。

有馬。 はあ。なんでも結構でございます。(シャツの上に單衣を着る。) はあ。丁度よ

うござはす。有難うござはした。

お雪。 帯がなくではいけませんまい。(白木綿の兵兒帯を持つて来る。)

有馬。 はあ。(帯をしめて刀をさし、裾をからける。)

伊八。 有馬さん。大層よく似合ひました。

有馬。 皆さん、ありがたうござはした。御めん下さい。

伊八。 有馬さん。柿はごうです。

有馬。 むゝ。少し貰うて行かうかな。

(有馬は五つ六つの柿をうけ取りて懐に押込み、ふところを押へながら出てゆく。)

伊八。 あの人も元氣が好いな。

お秀。 その元氣のいゝ人達が一日ごに減つてゆく。(ちつこなる。) 旦那様が

早う戻つて来て下さればよいが……。

伊八。 ほんにもうお歸りになりさうなものでございます。

(小銃の音つゞけて聞ゆ。お秀を始め、他の娘達も起ちあがりて下の方を見

……城山の月……

る。鰻屋音吉は手拭を鉢巻にして、身輕に扮裝ちて、下の方より走り出づ。

音吉。怪我人が急に殖えました。繻帶をください。

お秀。はい、はい。

(娘達は繻帶を持つて出る。小銃の音いよく烈しくなる。)

音吉。おゝ、撃つ、撃つ。忌々しい奴等だな。

伊八。鰻屋さん。おまへは朔日の晩から詰切りだね。

音吉。出前持の六の野郎と一所に、朔日の晩から城山に詰切りで、ふだんから

御最負になる御恩返しに、命がけで働いてるますよ。

お秀。御苦勞でございますな。

音吉。西郷様のお爲なら死んでも口惜しいとは思ひません。六の野郎も些とばかり怪我をしましたが、それでも威勢よく働いて居ります。では、又うかどひます。

お秀。氣をつけておいでなさい。

音吉。はい、はい。(下の方へ走り去る。)

伊八。どれ、わたくしもこの籠をお臺所の方へ運んで置きませう。

(伊八は柿の籠をかゝへて上の方の奥に入る。娘達は再び仕事にかゝる。下の方より西郷隆盛は破れたる筒袖、大小、木の枝の杖を持ちて出づ。)

西郷。濱津の奥さん、お變りはごはせんか。

お秀。おゝ、先生。

(人々は縁先に出て、叮嚀に挨拶す。)

お秀。取散して居りますが、さうぞお通り下さい。

西郷。いや、忙しいところをお邪魔しちやならん。こゝで好うござす。お構ひなさるな。皆さん、御苦勞でござすなう。

(西郷は縁に腰をかける。娘の一人は起つて奥へ湯を取りにゆく。)

お秀。どうしてお出かけになりました。弾が飛んでまるつてお危なうございます。

西 郷。(打笑む)あぶないと云うて、遅かれ早かれ死ぬんぢやござせんか。もぐらもちのやうに、土の中に潜り込んでばかりも居られんので、今日は幸ひに天氣も好いから、久振りで日の目を見に出ました。晝中はまだ暑うござすな。

お 秀。 當年は残暑がきびしいので、町の方ではコレラが流行るとか聞きました。

西 郷。 コレラが流行る。(顔をしかめる。)そりや困りますな。鹿兒島の町には今までそんな悪い病氣の流行つたこととはござせんぢやつたが、やつぱり戦争の故でござせうな。何しろ何萬人といふ敵の軍隊が一度に押込んで来る、それに連れて大勢の人夫ぎもが入込んで来る。衛生の注意も自然不行届になつて、コレラなども流行り出したと見えますが、考へてみると、鹿兒島の人達も氣の毒でござすな。戦争のために家は焼かれる、悪い病氣は流行る。(嘆息して。)なあ、奥さん。わたしは熊本に居つた時に、西郷は疫病神ぢやと云はれましたよ。

お 秀。 まあ、飛んでもないことを……。

西 郷。 いや、それがほんたうでござせう。お雪さん。

お 雪。 はい。

西 郷。 あんたの兄さんの治兵衛どんは、それがために腹を切つたのでござす。ある百姓が西郷は疫病神ぢやと云ふたとて、治兵衛どん大層腹を立て、いきなり其の百姓を斬つてしまつて、自分も申譯に割腹したのでござす。

お 雪。 それは先日森田さんから伺ひました。

(人々も眼を拭く。)

西 郷。 その西郷が故郷の鹿兒島へ歸つて、それがためにコレラを流行らせる。西郷はどうでも疫病神でござすよ。鹿兒島の人達も定めてわたしを怨んで居るでござせう。申譯のないことではす。(頭を垂れる。)

お 秀。 どういたしましたして、鹿兒島の者は一人でもあなたを怨んで居るものはない。ございません。どの人達も氣を揃へて、あなたの御無事を祈つて居るさうでござす。

西 郷。 そんなことはござすまい。

お雪。いえ、ほんたうでございます。

お道。神信心やお百度参りをして居る者も澤山あると云ふことでございます。

西郷。さうでござはるか。(眼を濡ませる) どうして其のやうに西郷を庇うてくるものでござはせうか。涙のこぼるゝほぎに有難うござはす。出来ることなら此の城山から出て行つて、鹿兒島の人達の前で大きい聲でお禮が云ひたうござはす。ふだん碌なことでもせんで居つて、大勢の人を殺して、大勢の家を焼いて、おまけに悪い病氣を流行らせて、疫病神とも悪魔とも譬へやうのない西郷を、なんで可愛がつてくるものでござはせう。有難いのを通り越して、わたしは何だか怖ろしうござはす。

(人々も涙ぐみて聴いてゐる。日ぐらしの聲きこゆ。西郷は聴くとも無しに耳を傾けるたるが、やがて又嘆息する。)

西郷。やつぱりわたしは長井で死んだ方がようござはした。

お秀。先生。

西郷。いや、ほんたうでござはす。さうで死ぬるなら、若い者どもに故郷を見せやる。わたしも其積りで戻つて来たのでござはすが、その若い者共も途中で三分一ほぎも見えなくなつてしまひました。その上に、久振りて戻つて来た故郷の人達にはさまざまの迷惑をかける。やつぱり戻らん方がようござはした。

お秀。それでも桐野さんのお話では、やがて鹿兒島の敵軍を追ひ拂つて、長崎の方へ進む筈だとか承はりました。故郷の人達に多少の迷惑をおかけなされても、所詮御勝利にさへなりますれば、それで宜しいのではございませんか。御承知の通り、主人の應輔も近郷の士族を募集するために、この間から出て居ります。井口さんもお出かけになつて居るさうでございます。

西郷。それは桐野が出て遣つたのでござはす。桐野は根氣の強い男ぢやで、この場合にも色々の智慧をめぐらして、何とかして運命を盛返さうと燥つて居ります。併しこの西郷の見るところでは……。 (力強い聲で) もういかん。

お秀。いけませんでせうか。

西郷。 いけません。それは熊本以来よう判つて居ります。まして斯うなつてから、いかに燥つても狂うても何うなるものぢやごはせん。就ては、我々は兎も角も、こちらの御主人や井口さんには、所詮無駄ぢやからもう味方して下さるなと色々お断り申したのぢやが、何うしても肯かんと云はるので、わたしも實は困つて居るのでごはす。奥さん、あんたから濱津さんに能う其譯を云うて意見して下さらんか。

お秀。(考へる。)折角でございしますが、わたくしの口から其のやうなことは申されません。

西郷。 忌でござはすか。

お秀。 主人も承知いたす筈がございませぬ。

西郷。 むむ。(思案してゐる。)

(奥より娘の一人は湯を汲んで出づ。)

娘。 生憎沸いて居りませんので遅くなりました。

西郷。 ありがたうごはす。(町寧に會釋して湯を飲む。)こゝでも日暮しが頻りに鳴いて居りますな。

お秀。 はい。

西郷。 きのふも若い者どもが此の日ぐらしを題にして、歌など詠んで居りましたよ。

お秀。 この頃はどちらにお住居でございます。

西郷。 さつきも申す通り、もぐらもちでござはす。(笑ふ。)十日までは野村さんの屋敷のうしろに穴を掘つて居りました。それから十三日までは馬乗馬場に米俵を積んで、その上に杉の葉を敷いて居りましたが、そこは砲彈が飛んで来て危険ぢやと云うて、又新しい穴を掘ることになりました。わたしは何うでも可いと思ふのぢやが、無理にすゝめられて此頃はそこに隠れて居ります。

お秀。(悼ましげに。)さぞ御窮屈でございませう。

西郷。 なに、わたしばかりぢやごはせん。桐野も森田も邊見も別府もみな然う

でござすよ。丁度蜂の巢か蓮の實のやうでな。これがほんの一蓮托生ぢや。は
ムムム。いや、えらい御邪魔をしました。(起ち上る。)

お秀。 もうお歸りでございますか。

西郷。 これから戦線を見まはつて來ます。

お秀。 総一人でおいでになりますか。

西郷。 はあ、一人で行きます。時に奥さん。わたしの着る物はまだ出來ません
か。

お秀。 お、お話に取紛れてすつかり忘れて居りました。(床の間より矢はり白
木綿の單衣を持來る。)甚だ出來でございます。

西郷。 や、ありがたうござした。(單衣をうけ取りて見る。)これで立派な經帷
子が出來ました。

お秀。 經帷子……。

(人々は顔を見あはせる。)

お秀。 縁喜でもないことを仰しやるな。(笑ひに紛らせる。)ほムムムム。

西郷。 はムムムム。皆さん、御めんなさい。

(西郷は單衣をかへて行きかゝる。)

お秀。 あの、先生。

(西郷は立ちどまる。)

お秀。 今まで一向に心付きませんでした。白の無地では何だか忌な心持もい
たします。

西郷。 い、ぢやござせんか。

お秀。 いえ、何うぞそれを烏渡お戻しく下さい。

(西郷は無言にて單衣を戻せば、お秀は床の間より硯箱を持ち出し、單衣の
脊中へ墨にて轡の紋を大きく書く。)

西郷。 は、あ、紋附でござすな。いや、ありがたう。これでいよく立派にな
りました。では、墨の乾く間、少し待つてゐますかな。

お秀。 すぐに乾きますから、少々お待ちください。

(西郷は庭をぶらぶらあるいてゐる。落葉しづかに降る。)

お秀。 鐵砲の音が聞えなくなりました。

西郷。 静かになりましたな。

(日ぐらしの聲。上方の木立の間より西郷隆盛と稱する狂人は木の枝を杖にし、肩を聳かして出で来り、西郷の前に突つ立つ。西郷は黙禮す。狂人は無言にて西郷を睨んでゐる。)

お雪。 あれ、又あの氣狂ひがまゐりました。

お秀。 時々にごまらへ這入つて來るので困ります。先生、それは氣狂ひでござ

います。

(西郷と狂人とは無言にて暫らく向ひ合つて立つ。お秀等は不安らしく縁先に出でうかゞふ。)

狂人。(やがて空を指さす。)星が見えるか。

(西郷は空を仰ぎて頭を掉る。)

狂人。 おれには晝間でも星が見える。

お秀。 晝間でも星が……。

狂人。 西郷隆盛にはちやんご見える。大きい星が光つてゐる。

(上方の奥より伊八出づ。)

伊八。 又いつの間にか這入り込んで來たな。さあ、さあ、歸つた、歸つた。

狂人。(再び空を指さす。)西郷隆盛は天へ昇るぞ。

伊八。 天へ昇る……。まあ、可いから、何うぞ歸つてください。

(伊八は狂人を宥めながら追ひ出さうとすれば、狂人は伊八を突き退けて再び西郷の前に突つ立つ。)

狂人。 こら、貴様は何者だ。西郷隆盛に降参しろ。

(西郷は黙して頭を垂れてゐる。)

狂人。(哮る。)さあ、降参しろ。

(狂人は杖にて西郷を打つ。伊八はおごろいて、狂人のうしろから抱き留める。お秀もお雪もお道も縁より駆け降りて支へようとす。)

西郷。 いや、構ふちやいかん、構うてくださるな。その人ばかりぢやない、誰に打たれても仔細ごはせん。

お秀。 でも、先生。

西郷。 その人がなぜ狂氣したか、わたしは知つて居ります。それだけでも西郷の罪は怖ろしい。ましてさつきからも云ふ通りでごはすから、鹿兒島中の人達に代るべく打たれても叩かれても、西郷の罪はなかく消えますまい。かならず構うてくださるな。伊八どん、押さへて居らんでも可い。

伊八。 はい。(躊躇する。)

西郷。 その人を放してあけるが可い。

(伊八はよんごころなく手を弛むれば、狂人は暴々しく突き退けて、再び西郷を打ちつゞける。人々ははら／＼してゐる。西郷は頭を垂れて、狂人のな

すまゝに任せてゐる。)

狂人。 西郷隆盛に負けたか、はゝ、ゝゝゝ。

伊八。 さあ、もうそれでよからう。こゝにゐる者はみんなあなたに降参します、屹と降参します。さあ、さあ、どうぞお歸りください。歸つてください。わたくしがお送り申します。

(伊八はしきりに宥むれば、狂人は悠然として上の方に立去る。伊八も附いてゆく。お秀等はほつとしてあとを見送る。)

西郷。 奥さん。着物の墨はもう乾きましたか。

お秀。 はい。(單衣を取りて西郷に渡す。)

西郷。 ありがたうごはした。

(西郷は單衣をかゝへて行きかゝる。人々は氣の毒さうに敬禮す。)

(二)

岩崎谷につゞきたる高地。平舞臺にて、あたりには芒など一面に生ひたり。所々に松杉の大樹ありて、正面の木の間より私學校附近の建物が低く見ゆ。(桐野利秋は倒れたる松の大樹に腰を掛け、森田金八郎は立木に倚りかゝりて立つ。水の音きこゆ。)

桐野。森田さん。濱津さんも井口さんもまだ戻らんさうでござすな。

森田。(頭を掉る。)戻らん。二人とも何うしたかなう。

桐野。近郷の士族どもを募集すると云ふことは、どうも思ふやうにいかんのか。それとも敵に覺られて捕縛されたかな。

森田。そんなことかも知れん。あれほど立派に受合うて出て行つた二人が、半月になつても戻らんの見ると、途中で發覺して捕縛されたのかも知れん。

桐野。遅くも十日頃までには一旦戻つて來ると云ふたんぢやからなう。(思案す

る。)して見ると、新に兵士を募集する見込みはないかな。

森田。無いと覺悟した方が確かではせう。長井を突出する時には五百人ほどではしたが、途中でだんくに減つて來て、この鹿兒島へ乗込んだ時には、兵士と人夫をあはせて三百七十人ほどになつてしまふた。それから又半月あまりの間に、戦死者や負傷者が百人あまりも出來てをるから、ほんたうに戦鬪力のあるもんは二百人ではござすまい。それを十一隊に分けて居るんぢやから、一隊が廿人にも足らん位で、何うにも斯うにもなることぢやござせん。彈藥はどうでござすか。

桐野。私學校と城山を占領した時に、敵の彈藥を奪ひ取つたので、彈藥はまだ缺乏するやうなことはない。糧食もまだ廿日分ぐらゐはある。その間に、新に募集した士族どもが千人……いや、その半分來てくても、もう一嵐吹かすことが出來るんぢやが……。これ、森田。何をほんやりして居るか。まあ、こゝへ掛けんか。

(森田は腕をくみながら、桐野と列んで腰をかける。)

森田。 いや、ほんやりして居りやせん。貴公の云ふことは皆判つて居る。併し桐野さん。もう斯うなつたら仕様がな。長井でおやちと約束した通り、立派に死なうぢやごはせんか。

桐野。(考へる。)死ぬのは何日でも死ねるからなう。

森田。(冷笑ふ。)貴公まだ未練があるか。

桐野。 あるなう。命は些とも惜いと思はんが、此のまゝ亡びるのは何うも残念でならん。もう一度長崎へ突出して、あすこを根拠地として大阪へ侵入して見た
いが……。

森田。(起ちあがる。)そりや夢でごはすよ。

桐野。 夢ぢやらうか。

森田。 その夢は貴公死ぬまで醒めんかも知れんな。

桐野。 醒めんでも可い。(笑ふ。)あきらめて成佛するよりは優かも知れん。

森田。(聞き咎める。)わしとても諦めやせん。諦めて居りやせん。諦められんで死ぬんぢやから、人一倍に苦しいんぢや。

(梢にて小鳥の聞きこゆ。森田はピストルにて撃つ。小鳥落ちる。)

桐野。(笑ふ。)なにをするんぢや。一つの弾でも大切の場合に、小鳥なご撃つて何うするか。

森田。 もう斯うなつたら、人を撃つも鳥を撃つもおなじことぢや。

桐野。 しかし味方を撃つてくるゝな。貴公は長井でお弓さんを殺したぢやないか。

森田。 あれは悪かつた。(再び腰をかける。)この間、お弓さんの阿母さんが尋ねて来た時に、わしは幾度もあやまつて置いた。

桐野。 強情な貴公もあやまつたか。

森田。 いくら強情でも、悪いことはあやまらにやならん。
(下の方より濱津應輔出づ。)

濱津。 おゝ、桐野さん、森田さん。こゝにおいでござしたか。

桐野。(起ち上る)濱津さん。待つてゐました。早速ながら募集の結果はどうでござした。見込通りに行きましたか。

濱津。 面目次第もござせん。

森田。 大方さうぢやらうと思つてゐました。

濱津。 どこもかしこも敵の警戒がきびしいので、どうすることも出来ないのでござす。それでも色々工夫して五六十人ほどは集めたのでござすが、それも忽ち警察に嗅ぎ出されて、片端から捕縛されてしまひました。わたしも危く捕縛されるところを、やうく潜りぬけて戻つて來ましたが、井口はどうなつたか判りません。かへすくも残念でござす。

桐野。 残念でござすなう。

森田。 そこで、濱津さん。敵軍の配置はどうでござすか。随分嚴重でござせん。

濱津。 實に嚴重でござす。二重にも三重にも竹垣を結つて、杭を打ち込んで、山の出口出口をかためて居ります。

森田。(罵る)畜生。猪狩でもする氣で居るんぢやらう。

桐野。 それも仕方がない。城山の狸狩すると云うて出た我々が、却つて猪狩をさるゝやうになつてしまふた。(さびしく笑ふ)

濱津。 そこでわたしも路を考へて來たことがござすが、あなた方に逢ふたは丁度幸ひぢや。(左右を見かへる)この城山に楯籠つてからもう半月あまりになります。味方の人数はだんくんに減つてゆくばかり、それで新に募集する見込がないとすれば、いかに藻掻いても狂つても、所詮長うは續きませんぞ。勿論、かうなつたら各々の御決心もござせうが、たゞ惜いのは西郷先生でござす。

二人。 むゝ。

濱津。 西郷先生は天下の英雄、わが日本國に取つても又と得られない大切のお人でござす。その先生をこゝでむざく亡ほしてしまふのは如何にも残念ではござ

はせんか。われくの私情ばかりでなく、まつたく國家の爲にもならんかと思ひます。就ては此際、なんかとして先生だけを助くる工夫はごはすまいか。

桐野。(しづかに。)そんな工夫がごはせうか。

濱津。わたしの考へでは……。西郷先生を必ず助命すると云ふ條件で、敵に媾

和を申込んでは何うでござせう。

桐野。熊本當時なら其策も行はれたか知らんが、今こなつては時が遅い。媾和

でなうて降伏ぢや。

濱津。媾和でも降伏でも、今はその名儀を論じてをる場合ではごはすまい。所

詮は西郷先生一人を助ければ可いのでござすから。

桐野。(矢はり冷かに。)降伏しても命が助かりたいと思ふやうな西郷さんぢやら

うか。

濱津。(熱心に。)それをあんた方から勧告して貰ひたいのでござす。わたしから

もお勧め申します。どうで降伏したからと云うて、我々の命が助かる筈はごはせ

ん我々は甘んじて死刑をうけても、西郷先生だけはお助け申したいのでござす。敵の方でも其位の理窟は判るでござせうから、われくが熱心に談判したら屹と承知するぢやらうと思ひますが……。

桐野。いや、敵の方で承知するとしても、こちらの西郷さんが承知する筈はな

い。第一、われくとしたところで、今更おめくと降伏は出来んぢやごはせん

か。
濱津。それは萬々お察し申して居りますが、此のまゝに先生をほろほすのは、情理いづれから考へましても忍びられんことではす。あんた方にも既う一度お考へ直しが出来んものでござせうか。

(森田は起つて濱津の前に立つ。)

森田。濱津さん。あんたは薩摩の士族の仲間でも、舊舊以來のお家柄でござすから、わたしもさつきから遠慮して聽いて居つたんぢやが、今更となつて降伏など何うしても出来ることぢやごはせんぞ。

濱津。(稍激して) どうしても出来ん。

森田。(同じく激して) 知れたことではす。それは西郷先生を助けるのでなうて、西郷先生を殺すんぢや。命を助かるのばかりが生きるのぢやごはせん。死んで却て生きる場合もある。あんたにはそれが判らんか。今更降伏などを主張するのは、西郷先生を侮り、あはせて我々をも侮辱するといふもんぢや。

桐野。(おなじく起つ。) まあ、待て。濱津さんも決して悪気で云ふのぢやない。それはよう判つて居る。まあ、静かにせんか。ところで、濱津さん。今お聞きの通りぢやで、その相談は此場かぎりにして下さい。

(濱津は黙して考へてゐる。)

森田。桐野さん。もう行かう。

桐野。われはこれから本營へ歸らにやならん。濱津さん、お先へ失禮します。

(濱津は黙す。桐野と森田は上の方に去る。小鳥の聲。濱津は腕をくみて

ちつと考へてゐるが、やがて俯向き勝に上の方へ行かうとする時、上の方より石村賢次郎、これも思ひありけにて伏目勝に出て來り、兩人ゆき違ひながら濱津は上の方に立去る。石村は初めて心づきて見返る。)

石村。濱津さんではないかしら。今日歸つて來られたのか。(二足ばかり立戻りて又立ちどまる。) まあ、さうでも可い。

(石村は倒れたる松の木に腰をかけて、うつとりと空を見あげてゐる。下の方より西郷隆盛は白木綿の單衣をかゝへて出で、石村の前を歩き過ぎて又見返り、しづかに立寄つて其傍に立つ。)

石村。(心づいて見あげる。) あ、先生。(あわてゝ起ちかゝる。)

西郷。まあ、可い。(再び腰を卸させる。) 石村。こゝに何をして居つた。

石村。(躊躇して。) はい。

西郷。おまへ此頃はどうも元氣がないぢやないか。病氣でもして居るか。

石村。いえ、別に悪いところもございません。

西郷。悪くなけりや可いが、さうも元気がないやうぢやぞ。(間)おまへ東京が戀しうなつたか。

石村。(頭を強く掉る。)そんなことはございません。

西郷。東京へ歸りたければ歸つても可いぞ。

石村。いえ、決して歸りたくはございません。

西郷。さうか。

(云ひながら西郷はそこらに落ちたる雀の死骸に眼をつけて拾ひあける。)

西郷。この雀は弾に撃たれて居る。(雀をながめてゐる。)石村。おまへは弾にうたれた雀のことを考へて居るんぢやないか。

石村。え。

西郷。お弓さんは可哀想なこゝをししたなう。

(石村はうつむいてゐる。)

西郷。わしもそれまでは一向に氣が注かんぢやつたが、お弓さんがお前を慕う

て居つたといふことを、長井を立つ晩に初めて知つた。なあ、さうぢやないか。森田がお前にピストルを向けた時に、お弓さんは自分のからだを楯にしておまへを庇ふた。お弓さんはおまへの身代りになつたんぢや。なみくのことでそれが出来るもんぢやない。わしもその時にお弓さんの心を初めて覺つて、一倍に氣の毒に思つてをる。おまへもそれを考へて居るんぢやないか。

石村。恐れ入りました。

西郷。やつぱり然うぢやつたか。

石村。先生(土に手をつく。)何も彼も隠さずに申上げます。先生の仰しやる通り、わたくしも長井を立つ晩に初めてお弓さんの心を知りました。それでも鹿兒島へ歸るまでは、自分の氣が張りつめて居りましたので、それほどにも思つて居りませんでした。いよく無事に歸り着きますと、その晩からお弓さんの顔形が眼の先にちら付いてなりません。それがだんくに劫じて来て、この頃では成るべく人のゐないところを探して、自分一人でお弓さんのことをぢつと考へてゐる……城山の月……

たくなりました。それが先生のお眼にとまつて、何とも申譯がございません。どうぞ御勘辨をねがひます。

西郷。いや、あやまるには及ばん。おまへの心もよう判つてをる。それに付け
ても、わしはおまへを殺したうない。今の中に早うこゝを立退いたらどうぢやな。
お弓さんの魂もおまへを殺したうないと思つてをるに相違ないぞ。

石村。それでございますから猶のこと、わたくしも早く死にたうございます。

西郷。早う死にたい。お弓さんのそばへ行きたいか。

石村。(眼を拭く。)いえ。先生の前でこんな女々しい事をいつまでも申上げて居
つては相済みません。お弓さんのことなどは何うでもよろしうございます。かね
てのお約束通り、わたくしは先生と生死を共に致さなければ相成りません。その
外にはもう何にも考へるには及ばないのでございます。

西郷。ごうしても立退かんか。

石村。立退きません。わたくしは飽までも先生のおそばに附いてをります。

西郷。では、長井での約束通り、やつぱりお前に介錯を頼むかなう。
石村。屹も其のお約束を果します。

(この時、西郷は俄に耳を傾ける。)

西郷。あ、ほんの聲ぢやないか。

石村。え。(左右を見まはす。)

西郷。犬の聲が聞ゆる。おまへには聞えんか。

石村。犬の聲……。わたくしには聞えませんが……。(しきりに見まはしてゐる。)

西郷。では、わしの空耳かも知れん。

(下の方より西郷の僕虎吉、人夫の姿にて出づ。)

虎吉。お、旦那様。(駆けよる。)

西郷。虎吉。おまへはいつ鹿兒島へ歸つて来たか。

虎吉。一週間ほご前にやうく戻つてまゐりました。長井でお別れ申してから、

……城山の月……

わたくしは百姓の姿になりまして、敵の目をくゞつて無事に戻りましたが、何しろ城山の四方八方は敵が嚴重に取りまいて居りますので、滅多に這入つて來ることが出來ません。

西 郷。 それぢやから來るにや及ばんご云ひ聞かして置いたに、あぶない所をなせ來たか。

虎 吉。 どうも御屋敷にぢつとしては居られませぬので、今度は敵の人夫に化けまして、どうか斯うにか這入り込んでまゐりました。

石 村。 お留守宅にお變りはありませんか。

虎 吉。 なんにもお變りはございませぬ。どうぞ御安心ください。

西 郷。 今もほんの聲を聞いたよ。

虎 吉。 え。

石 村。 先生は犬の聲が聞えたと仰しやるのです。

虎 吉。 犬は三匹にも無事でございます。せめて一匹でも連れて來て御覽に入

れたいと思つたのでございませぬが、西郷さんの犬と云へば誰でも知らない者はございませぬ。それをうっかり引張つてあるいて、敵に見咎められては大變だと思ひまして、残念ながら連れて來ることが出来ませんでした。

西 郷。 いや、無事でさへあればそれで可い。市郎助も勤めて居るな。

虎 吉。 はい。これも達者で御奉公いたして居ります。

西 郷。 折角來たもんぢや、皆にも逢うて行かんか。

虎 吉。 是非お逢ひ申してまゐりたうございます。何か持つてまゐりたいと存じましたが、何分にも敵が嚴重に見張つて居りますので、大きなものなごを抱へてまゐる譯にはまゐりませぬ。(腰につけたる包を解く。)氷砂糖を少々ばかり持つてまゐりました。

西 郷。 それは何よりぢや。皆も喜ぶぢやらう。さあ、來い。(行きかけて石村を見かへる。)石村。

石 村。 はい。

西郷。この雀をどこにか埋めて遣らんか。

(西郷は石村の顔を見ながら雀の死骸を渡してやれば、石村は無言にて受取る。西郷は抱へたる單衣を虎吉に持たせて上の方に去る。石村は雀をながめてちつと考へてゐるが、やがて雀を地に投げ捨てる。)

石村。こんな事ぢやいかん。

(石村は足早に上の方に去る。下の方にて小銃の音はけしく聞ゆ。石村は引返して出づ。つゞいて西郷は足早に出づ。虎吉もあとより附添うて出づ。)

西郷。(聲はけしく。)石村。攻撃は何の方面ぢやな。

石村。草牟田から新照院越の方面らしく思はれます。

西郷。む。あの方面は足場が好いので、敵は兎かくに攻撃し居るな。

石村。あの方面から侵入しようと思つてゐるのでございませう。

西郷。破られちやいかん。早う見て来い。

石村。は。

(石村はすぐに下の方へ走りゆく。小銃亂發。西郷は杖を把り直して、下の方を屹とながめてゐる。上の方より森田金八郎は兵士數人を率ゐて走り出づ。)

森田。西郷さん。敵はまた攻撃を始めましたな。

西郷。石村を今見せに遣つたが、草牟田か新照院越らしいぞ。

森田。すぐに行つて追ひ攘うて來ませう。

西郷。む。あんたが行くならわしも行かう。

森田。いかん、いかん。(遮る。)あんたが行くには及ばん。わしだけで澤山ぢや。

(下の方より雨倉彌太郎は彈にあたりし體にて駈け來りて倒れる。)

西郷。(せはしく。)遣られたのは誰ぢや。

森田。(雨倉をかへ起す。)雨倉でござす。

西郷。雨倉か。(進み寄る。)これ、しつかりせい。

森田。しつかりせい、しつかりせい。

……城山の月……

(人々は雨倉を呼び掛けようとする。小銃の音。正面の木の間に私学校の焼くる煙見ゆ。下の方より飯原勝彌は負傷したる武上一作を肩に引つけて出づ。)

西郷。 おゝ、又遣られたか。

森田。 今度は誰ぢや。

飯原。 武上一作でござす。

西郷。 武上か。こゝはわしが引受くる。おまへ達は早う行け。

飯原。 はあ。

森田。 (兵士等に。)おまへ等も行け。

兵士一同。 はあ。

(飯原と兵士等は下の方に走りゆく。)

虎吉。 (負傷者を覗いて。)やれ、やれ、みんな可哀想になあ。

森田。 どつちもむづかしさうでござすな。

西郷。 せめて一人でも生かさにやいかん。

(西郷は肌をぬぎてシャツになり、武上をかゝへ起す。)

森田。 虎吉、早う水を持つて来い。

虎吉。 はい、はい。(下の方へ走りゆく。)

西郷。 武上……。どうぢや。

森田。 雨倉……。雨倉……。

(二人はしきりに負傷者を介抱してゐる。小銃の音。私学校の火の手はだんくに燃えあがる。上の方より桐野利秋は足早に出づ。)

桐野。 (火を見る。)おゝ、焼くる、焼くる。おゝ、西郷さん。あの通りに焼けますわ。

(西郷と森田は見かへる。)

森田。 おゝ、學校が焼くる……。

(二人は思はず手を放せば、雨倉と武上はそのまゝ倒れる。學校の火はいよ……城山の月……)

く熾になる。

桐野。學校もたうとう灰になるか。

森田。われく古巢も焼かれてしまふか。(冷笑ふ。)いつそ思ひ切りが好い

かも知れんな。

西郷。む。焼くる……。

桐野。古巢が焼くる……。

(三人は火のあがるをちつと眺めてゐる。幕。)

第三幕

城山土窟の前。正面には崖の裾を掘りたる土窟三ヶ所あり。いづれも間口は一間ぐらゐる、高さは一間半に過ぎず。崖には秋草生ひしけりて、上より稍や黄ばみたる紅葉の枝など差し出でたり。所々に杉の大樹ありて、これにも蔭

なぎ纏へり。左右は雑木林にて、熊笹なども生ひたり。九月二十三日、舊曆八月十五夜の月明かにして、蟲の聲しきりに聞ゆ。

(下の方より鰻屋音吉は薄縁をかゝへて出で、月の光を仰いでゐる。やがてあとより西郷の僕虎吉もおなじく薄縁をかゝへて出づ。)

虎吉。うなぎ屋さん。やつぱりこゝらが好からうかね。

音吉。月を観るにはさうもこゝらですな。

虎吉。む。いゝ月だな。

音吉。いゝ月ですな。

(二人は月を仰いでゐる。下の方より出前持の六松は頭に纏帯して、葡萄と柿栗なぎを入れたる籠をかゝへて出づ。)

六松。お酒盛はこゝで始まるんですか。

音吉。こゝらが好さうだ。さあ、そろく仕度を始めようか。

(三人はよきところに薄縁を敷く。下の方より濱津の僕伊八は二つの酒壺を

……城山の月……

かへて出づ。)

否

伊八。 皆さん、御苦勞です。もうお仕度は出来ましたか。

虎吉。 お酒はありましたかね。

伊八。 なにしる四方八方を圍まれて、買ひに出ることが出来ないのだから仕様がありませんよ。方々の御屋敷にある酒もみんな飲み盡してしまつたのですからね。

虎吉。 それでも何處からか探して来て下さつたかね。

伊八。 小川さんの御屋敷でやうくこれだけ貰つて来ましたよ。いやもう甚いどぶろくで、迎も皆さん方にはあけられないと云ふのですが、それでもまあ可いからと云つて無理に貰つて来ました。

虎吉。 かうなれば何でも結構。さあ、さあ、これで御座敷が出来た。それではこれから手分けをして、皆さんのところへ報せて来なければならぬ。三人。 さうだ、さうだ。

(人々はそこらを整理して、音吉と六松は上の方に去る。伊八は下の方に去る。虎吉は第二の土窟の前にゆきてひざまづく。)

虎吉。 旦那様。 もう御仕度が出来ましてございます。

(虎吉は更に第一の土窟の前にゆきて、聲をかける。)

虎吉。 桐野様。 どうぞおいで下さい。

(虎吉は更に第三の土窟の前に行きて聲をかける。)

虎吉。 森田様。 もう宜しうございます。

(云ひ終りて、虎吉は下の方に立去る。蟲の聲絶えず、その間には梟の聲もきこゆ。第二の土窟の入口を掩ひたる枯枝なごを押分けて、白の單衣を着たる西郷隆盛出づ。やがて第一の土窟をくぐりて桐野利秋出づ。)

西郷。 ほう、いゝ月ぢや。 丁度舊曆の十五夜ぢやとか云ふことではすが……
桐野。 まつたく空はよう晴れてゐますな。

(第三の土窟より森田金八郎出づ。)

森田。 明るい晩でござすな。

西郷。 この頃は敵の砲撃がはけしいので、夜でも迂濶には出られん。一三日振りて明るい月を見て、はれぐしい心持になつたぢやござせんか。

(三人は立つたるまゝにて月をながめてゐる。)

桐野。 西郷さん。一詩出来んか。

西郷。 (笑ふ。)出来んなう。

森田。 われぐの計畫が最初の豫定通りに進行してをつたら、今夜の月をどこで観て居るぢやらうな。

桐野。 芝浦かな。

西郷。 桐野さんぢやつたら、新橋あたりで今夜の月を眺めて居りやせんかな。

はムムムム。 どうぢや。

桐野。 それこそ昔の夢でござすわ。はムムムム。

西郷。 三五夜中新月の色、二千里外故人の心。丁度今あなたの身の上ぢやござ

はせんかな。

桐野。 さう戯かはれちや何うも叶はん。おい、森田。なんとか加勢してくれんか。

森田。 あなたの加勢は出来んな。新橋や柳橋はごうでも可いが、今夜の月をこゝで観るのは如何にも残念ぢやつたなう。

西郷。 森田さん。それはもう云はんが可い。

(西郷はうす縁の上に坐る。桐野も森田も坐る。)

西郷。 もう酒が来て居るぢやござせんか。

桐野。 ほかの者はどうしたかなう。

森田。 やがて集まつて来るでござせう。そこで、桐野さん。あなたに訊きたいことがござすが、あの濱津さんを敵陣へ遣つたのはあなたでござすか。

桐野。 わしが遣つたのぢやない。

森田。 あんたが遣つたのぢやない。

西郷。(しづかに)濱津さんはわしが遣つたのぢや。
二人。え。

森田。(すり寄る。)なんと云うて遣られたのでごはすか。

西郷。濱津さんが歸れば自然に判る。まあ、聞かんで置いてくれ。

(二人は顔を見合せてゐるが、森田は忽ち起ちあがる。)

森田。こりやいかん。桐野さん。濱津さんの出たのは何時頃ぢや。

桐野。さあ、六時頃ぢやつたかも知れん。

森田。(時計を出して見る。)それからもう二時間あまりも過ぎてをる。あゝ、い
かん、いかん。濱津さんの出て行くのを知つちよつたら、おれは腕づくでも押へ
付けるんぢやつたが……。 (又坐る。)西郷さん。あんたは濱津さんに何と云うて遣
つた。

西郷。なんと云うて遣つても可いぢやないか。

森田。いや、よくない。西郷さん。あんたは自分一人が腹を切つて、みんなの者

を助けてくれと云うて遣りやせんか。

(西郷は答へず。)

桐野。(詰めよる。)西郷さん。あんたはそんなことを云うて遣つたか、そんな馬
鹿なことを云うて遣つたか。

(西郷は答へず。)

桐野。濱津さんはどうもいかなう。

森田。まつたくいかん。この間は西郷さん一人を助けるのを條件にして、われ
く一同に降伏せいと勧める。今夜は又西郷さんの使に行く。何が何だか判らん
ぢやないか。

西郷。(俄に口をひらく。)なんぢや、森田さん。もう一度聞かしてくれ。濱津さ
んはこの間、西郷一人を助けるのを条件にして一同に降参せいと勧めたか。

森田。さうでござす。

西郷。あ、いかん。それぢや濱津さんを遣るぢやなかつた。敵の方へ行つて何

をいふか判らん。西郷を助けてくれなどとあべこべのことを云やせんかな。こりや困つた。悪いことをしたなう。

桐野。一體あんたが我々に相談もせんで、濱津さんを出してやるのが悪い。あんな人を出してやれば、どつちにしても碌なことになりやせん。

西郷。濱津さんはそんなことを考へて居つたのかなう。

森田。まあ、ようごはす。あの人が何と云うて戻つても、こつちで取合ひさへせんけりやそれで可いのでごはすから。なあ、桐野さん。

桐野。まあ、構はんで置けば可いのぢや。

(西郷は黙して考へてゐる。下の方より平田壯之助、上村源三、飯原勝彌、
鮫島新七の四人出づ。あとより虎吉と伊八も出づ。)

四人。遅うなりました。

(四人は會釋して坐る。)

桐野。やあ、みな來たか。前線に居るものは持場を捨てゝ來るといふ譯にも行

かんのので。氣の毒ぢやが仕方がない。本營に居るものだけに集まつて貰ふたのぢや。今夜は舊曆の十五夜ぢやで、先づ陣中の月見といふ趣向ぢやが、知つての通りで酒もない肴もない。たゞ打寛いで話すだけのことぢや。その積りで居つてくれ。

四人。ありがたうごはす。

(上の方より有馬銀之助、谷山盛彦、坂本宗平の三人出づ。あとより音吉と六松も出づ。)

三人。今晚はありがたうごはす。

桐野。あまりに禮を云はれちや困る。何も御馳走はないのぢやからなう。はゝゝゝゝ。

虎吉。さあ、お始めになつては如何でございます。

森田。むゝ。飲まう。これ、うなぎ屋。西郷さんに酌をしろ。

音吉。かしこまりました。(西郷の前に進み出づ。先づあなたからお始めくださ

い。

西郷。(快潤に)むむ。久振りで鰻屋に酌をして貰はうかな。(杯を把る。)

音吉。(酌をする)ごうもお酒がよろしくないのでお氣の毒でございます。わた
くしの店には好いお酒があるのでございますが……。

西郷。(笑ふ)なんほ好い酒があると云うても、おまへの家へは行かれんぢやな
いか。まあ、何でも可い。悪い酒の方が早う酔ふかも知れん。(酒を飲む。)

(音吉は更に桐野にも酌をする。森田にも酌をする。)

森田。おまへの家の鰻は既う食ふことは出来んな。

音吉。なぜでございます。

森田。なぜと云うて大抵判つて居るぢやないか。

音吉。はい。

森田。毎々云ふことぢやが、お前の家の鰻はごうも鹽が辛うていかん。これか
らは氣をつけにやいかんぞ。これはおれの遺言ぢや、よう聽いて置け。

音吉。はい、はい。かしこまりました。

桐野。おい、おい、うなぎ屋。

音吉。はい、はい。

桐野。おまへの家は塩が辛いばかりぢやない、勘定の方も些と辛過ぎるぞ。お
れ達のやうな無勘定の客ばかりはないから、今後はその積りで氣をつけろ。

音吉。はい、はい。恐れ入りました。

虎吉。うなぎ屋さん。大分手きびしく吐られますね。

音吉。かうして遠慮無しに吐つて下さるのもお馴染甲斐でございますよ。(涙ぐ
む。)

有馬。その代りこれからは貴様の家の障子を破るものも無いわ。

谷山。出前持をなぐる者もないわ。

有馬。谷山。安心しろ、安心しろ。

音吉。いえ、かうなりますと、障子や襖を些とぐらる損じられましても、やつ

ばり相變らず御最辰を願ひたうございます。

平田。 どうぢや、出前持。

上村。 貴様も相變らず毆られたいか。

六松。 (頭を押へる。) さあ、それはごうも……。相變るやうに願ひます。

西郷。 ほんに出前持は負傷して居る。おまへ達が毆つたのか。

飯原。 いや、今度のはさうぢやごはせん。

鮫島。 崖から轉け落ちて自分で負傷したのでごはすよ。

坂本。 こいつ意氣地がないもんぢやで、小銃彈の飛んで來るのに驚いて、逃ける機に轉け落ちたのでごはす。

伊八。 六さんも評判が悪いやうだ。口塞けにお酌でもしたら何うだね。

六松。 そんなここにしませう。

(六松は上の方の兵士等に酌をする。伊八も下の方の兵士等に酌をする。西郷、桐野、森田も音吉の酌にて飲む。)

桐野。 酒は悪いが、久振りでよい心持になつた。さうぢや。誰か劍舞でも遣らんか。

西郷。

飯原、遣れ。

飯原。 はあ。鮫島、吟聲を頼むぞ。

(飯原はまん中に進み出れば、鮫島は「鞭聲肅々」を吟じ、飯原は刀をぬいて舞ふ。上の二句を終りし時に、森田が聲をかける。)

森田。 さあ、みなも一所に吟じろ。

(兵士等は聲をそろへて、「遺恨十年」以後の二句を吟ず。飯原は舞ひ終る。人々は手を拍つ。飯原は一禮して退く。)

森田。 流星光底長蛇を逸す。謙信も残念ぢやつたらうなう。

西郷。 は、それはもう云はん筈ぢや。これ、虎吉。

虎吉。 はい。

西郷。 今度はおまへの番ぢやぞ。いつもの馬方踊でも遣らんか。

虎吉。 いや、それは御免を蒙ります。

伊八。 旦那様のお聲がかりだ。ぢいやがお箱の馬方踊といふのを是非見せて貰ひたいな。

兵士一同。 ぢいやも遣れ、遣れ。

伊八。 さあ、遣つた、遣つた。

(伊八は無理に虎吉を引き出さうとする。)

虎吉。 いや、いけない、いけない。

(二人は捨臺詞にて争ふところへ、下の方より石村賢次郎出づ。)

石村。 先生に申し上げます。

西郷。 石村。 なんぢや。

石村。 濱津さんがお歸りになりました。

森田。 濱津さんが歸つた。(起ちかゝる。)

西郷。 まあ、可い。(石村に)濱津さんが歸つたらこゝへ通せ。

石村。 はあ。(引返して去る。)

虎吉。 やれ、やれ、いゝ所へ濱津さんが来て下さつて、これで先づ助かつた。

(下の方より石村は濱津應輔を案内して出づ。)

西郷。 やあ、濱津さん。御苦勞でございました。

濱津。 唯今歸りました。

(濱津は一同に會釋して坐に着く。)

濱津。 早速ですが、井口守衛は捕縛されたさうでござはす。

西郷。 井口さんはやつぱり捕縛されましたか。

濱津。 九月六日に捕縛されたと云ふことを今晚敵陣で承知しました。それは先づそれとして……。(一坐を見まはす。こゝで一切を申上げて宜しうござはすか。

西郷。 よろしうござはす。差支へござせん。

濱津。 敵の本營へ赴きまして、使の口上を申述べましたる處……。(云ひかけて

躊躇する。)

西郷。敵の方では何と云ひましたか。

濱津。若し果して媾和の意思があるならば、西郷自身に本營へ出向いて来いとのことではした。

(一坐俄に色めく。)

森田。何、西郷さん自身に本營へ出向いて来いと……。濱津さん。あんたは一體どういふ使に行つたのでござはすか。

濱津。西郷先生のお使にまゐりました。

桐野。それは判つて居るが、その使はどういふ口上でござはすか。

濱津。え。(躊躇する。)

西郷。(しづかに。)斯うなつたら正直に何も彼も云はにやならん。わしが濱津さんに頼んだ使の口上は、森田さんの想像した通り、西郷一人が自滅して、一統の者を無條件で助けてくれと云うて遣つたのぢや。

(一座は又色めく。)

桐野。森田。西郷さん。

兵士一同。先生。

西郷。まあ、騒いぢやいかん。そこで、濱津さん。あんたは敵陣へ行つて何ぞ申込んだのでござはすか。

濱津。かうなればわたしも正直に申します。わたしは先生の御口上を逆に取次いだのでござはす。われく一統は尋常に降伏して、如何様の處刑にも服しますれば、西郷先生一人だけは無條件で助命してくるゝやうにと……。

森田。(堪へ兼ねて。)濱津さん。あんたは又それを云ふたか。この間もあれほど云うて聞かされたに、まだ判らんでそんな小刀細工をする。あんた何うでも西郷さんや我々に恥辱をあたへたいのか。

桐野。濱津さん。あんたも随分強情ぢやなう。さうして、敵の方では西郷さん自身に本營へ出向いて来いといふ。それに對して、あんたは何と返答したのでござはすか。

濱津。 それでは西郷先生自身が敵の軍門に降るやうなものぢやで、逆も御承諾はあるまいと、わたしも頻りに争ひました。勿論、一生懸命に争ひましたが、先方ではどうしても肯入れません。兎もかくも立歸つて、今夜の十二時までに有無の返事をしろ。その時刻までに何の返事もなければ、西郷は不承知のものと認め、明朝四時から總攻撃を開始することではした。

西郷。 さうではしたか。西郷一人が切腹して、皆の者を無條件で赦してくるゝと云ふならば、わたしは勿論覺悟の前ぢやが、西郷自身に出向いて行つて、敵の軍門に降伏せよと云ふのでは、どうも承知は出來んな。

兵士一同。 勿論ではす。

森田。 假に敵の方で、西郷さんが切腹したら我々一同を赦すと云ふたところで、承知の出來るものぢやない。又、われく一同が降伏して西郷さん一人を助くると云ふたところで、西郷さんが承知する筈がない。どつちにしても、濱津さん、所詮無駄であることは判り切つて居るぢやごはせんか。

西郷。 まあ、さう濱津さんを責めんが可い。たとひ口上を逆に取次かうとも、もとく濱津さんを出して遣つたのはわしぢや。悪かつたらばあやまる。勘辨してくれ。そこで、敵の方では今夜の十二時までに返答せよと云ふたのでごはすな。

濱津。 さうではす。

西郷。 (一座を見かへる。) その返答をどうするかな。

桐野。 勿論返答する必要はごはすまい。

森田。 たゞ打捨つて置けば可いのでごはす。

兵士一同。 勿論ではす。勿論ではす。

西郷。 わしもさう思ふ。それでもう事は決まつた。何も考へることも議論することごはすまい。敵の總攻撃は明日の午前四時ぢやといふから、まあ、ゆつくり飲まうぢやごはせんか。

桐野。 ようごはせう。

森田。 ようごはせう。

西郷。 まだ酒はあるかな。

音吉。 まだ少々はございます。

西郷。 ついでくれ。

音吉。 はい、はい。

石村。 (音吉は酌に立たうとする時、末坐より石村すゝみ出づ。)

西郷。 先生。 そのお酌はわたくしにさせて下さい。

石村。 では、石村。 おまへに頼まう。

西郷。 (石村はすゝみ出て、音吉より酒壺をうけ取り、西郷の前に出て酌をする。)

石村。 おまへ泣いて居るか。
いえ、泣いては居りません。東京から先生のおあとを慕つてまゐりました。三年越し御世話になりながら、碌々御恩返しも出来ませんで、唯それが残念

でございます。

西郷。 わしの方こそ碌々におまへの世話も出来んで、却つてお前の世話になつた。くごくも云ふやうぢやが、お前だけは歸つたら何うか。

桐野。 おまへは他國者ぢやで、歸つても可いぞ。

石村。 それは考へました上で、改めて申上げませう。就きましてはわたくしは一旦退席いたしても宜しうございませうか。

西郷。 おゝ、勝手にするが可い。

石村。 はい。

(石村は西郷の顔を仰ぎ、暗に訣別の意を表して下の方に去る。海軍の軍樂の聲遠くきこゆ。人々は耳をかたむける。)

森田。 海軍の樂隊らしいな。

濱津。 敵は明朝總攻撃の準備として、今夜は各部隊に休養をあたへ、海軍の軍樂隊を上陸させて、陣中で奏樂させるとか聞きましたれば、大方それでござせう。

西郷。 さうでござはすか。 四面楚歌の聲とは違つて、樂隊の方が賑かてようござせう。

桐野。 敵の音樂で酒飲むのも面白からう。

(軍樂の聲つゞけて聞ゆ。人々は再び酒を飲む。)

西郷。 ほう、月はますます冴えて來た。(空を仰ぐ。)

兵士一同。 いゝ月でござはすなう。

森田。 これでは明日も天氣ぢやらう。

西郷。 むゝ、天氣ぢやらう。時にどうぢや、若い者どもは眠たくはないかな。

森田。 どうで明日からはいつまでもゆつくり眠られるんぢや。徹夜しても好う

ござせう。

桐野。 しかし眠りが足らんと、いざと云ふ時に思ふやうに働けんぞ。誰も彼も

今夜かぎりの命ぢや。手足を伸ばして高聲で眠つたらどうぢやな。

西郷。 さうぢや。今夜かぎりの命にしてからが、出来るだけは好う眠らにやい

かん。ほかに御馳走もないんぢやから、もう此位にして寝たら何うか。

有馬。 では、われゝはもう御免を蒙らうかな。

飯原。 むゝ、さうしようか。

鮫島。 では、皆さん。御めん下さい。

兵士一同。 御めん下さい。

西郷。 踏んぞり返つて寝にやいかんぞ。

一同。 はあ。

(兵士等は西郷を始め、桐野と森田にも會釋して、左右に別れて去る。軍樂の聲絶えず聞ゆ。)

虎吉。 ちつと其處らを片附けませうか。

(虎吉と六松は兵士等の薄縁を片附ける。)

森田。 もう酒はないかな。

(音吉と伊八は酒壺を振つて見る。)

音吉。 もうおつもりになりました。

伊八。 こちらも空になつてしまひました。

桐野。 酒が無うなつたら水を飲んだら可いぢやないか。それがほんの水盃ぢや。

森田。 そんな芝居のやうなこと、おれは嫌ひぢや。(杯を投げ捨てる。)では、酒盛はもう止めにして、寝る前に一度、前線を見まはつて来ようかな。

桐野。 さうぢや。明朝四時には敵軍の總攻撃が始まるこいふことを各部隊にも通知して、最後の決戦準備をさせにやなるまい。

西郷。 何分たのみますぞ。

桐野。 ようごはす。では、森田さん。行かう。

森田。 むゝ、行かう。(西郷に。)われ々には構はんでお休みください。

(桐野と森田は上の方に去る。)

西郷。 もうこゝら片附けたら何うぢや。

虎吉。 はい、はい。

(虎吉、伊八、音吉、六松等は薄縁や酒の道具を片附けはじめる。西郷は起ちあがりて月を仰ぐ。濱津も思案しながら起つ。)

西郷。 濱津さん。今夜は家へ戻つたら何うでござす。奥さんが待つて居るぢやらうが……。

濱津。 それよりも先生。あんたはもう一度お考へ下さらんか。

西郷。 何を考へるのでござすか。

濱津。(左右を見かへる。)そこらを片附けてしまふたら、おまへ達はあつちへ行つてくれんか。

四人。 はい、はい。

西郷。 あしたはいよく敵の總攻撃ぢや。おまへ達は彈の來るところに隠れて居れよ。

四人。 はい。

(音吉、六松、虎吉、伊八は西郷に濱津に一禮し、しほくとして下の方に立去る。月の光いよく明るく、軍樂の聲きこゆ。西郷は月と共に澄めるやうな心にて、いつまでも空を仰いでゐる。濱津も暫らく黙してゐる。下の方より濱津の妻お秀出づ。)

お秀。(濱津を呼ぶ。)あなた……。

濱津。秀か。

西郷。(見かへる。)やあ、濱津の奥さん。どうして今頃おいでよごはした。わたしも今、濱津さんに今夜は歸れと云うて居つたところでごはしたよ。(微笑む。)

お秀。いえ、わたくしは主人をたづねて參つたものではございません。先生のお迎ひにまゐりました。

西郷。わたしの迎ひに……。

お秀。左様でございます。御承知の通り、主人の應輔はこの朔日以来、めつたに屋敷へ歸つたことはございません。それが先刻めづらしく戻つてまゐりました。

て、わたくしに色々の相談がございました。(濱津に。)もし、あなた。まだ先生にお話をなさらないのでございますか。

濱津。まだそれを云ひ出す機会がないので、實はさつきから苛々して居つたのぢや。先生。うるさく申上げるやうではすが、もう一度お考へ直しはなりませんまいか。

(西郷は無言にて首をかしげる。)

濱津。先生の御覺悟はよく判つて居ります。それを今更兎やかくと申上げるのは恐れ入りますが、ごう考へても先生を此のまゝ亡ほしてしまふのは餘りに残念でございます。まつたく残念でなりません。併し敵の方でわれ々の要求を容れてくれん以上、先生のお命はもう一日に迫つて居るのでございます。

お秀。それを何うかしてお救ひ申したいと、主人も色々に心配いたしました。一先づあなたをわたくし共の屋敷内へお隠まひ申すことに致しました。

西郷。あんた方の屋敷へ行く……。

濱津。 さうでござはす。わたしの屋敷は構へも廣うござはすから、御窮屈でも奥の座敷の床下にお忍び下すつたら、敵の方でも容易に氣が注くまいかと存じます。さうして、圍みの解けた頃に窃と抜け出すやうになされては如何でござはせう。

お秀。 たまひ主人が居りませんでも、わたくしが命がけて屹と御守護いたします。必ずお隠まひ申します。

濱津。 萬事は家内が心得て居りますから、夜の明けん中に早うお越しく下さい。

(西郷は黙してゐる)

濱津。 先生。

お秀。 先生。御不承知でございますか。

西郷。(しづかに)承知不承知を云ふ前に、先づあんた方に訊きたいことがござはす。今年の二月以來、肥後と日向と薩摩の三ヶ國を戰場にして、薩摩の若い者が何千人死にましたか。

二人。 え。

西郷。 その何千人を殺して置いて、西郷一人が生きて居つて好うござはすか。

(夫婦は顔を見あはせる。)

西郷。 折角の御親切ぢやが、もう何にも云うて下さるな。まして西郷は賊軍の大將でござはす。西郷は朝廷に對して毛頭も不忠を存するものではござはせんが、不幸にして賊徒の名を負はねばならぬ身の上となりました。その罪を洗ひ淨むるには、自分の血を以てするより外はござはせん。わたしは熊木で死なうとしました。日向の長井でも死なうとしました。それが二度ながら妨げられて、死ぬにも死なれん苦しい月日を送つて居りましたが、明日こそはいよいよ最後の捌きを受くる日となつたのでござはす。濱津さん、判りましたか。

濱津。 はい。

西郷。 奥さんも判りましたか。

お秀。 はい。(泣く。)

(下の方より有馬銀之助と虎吉出づ。)

有馬。先生。石村が割腹いたしました。

西郷。石村が腹を切つた……。

有馬。谷の出口の路傍で、立木の根下に寄りかゝりながら、見事に腹を切つて居りました。

西郷。別に書置のやうなものも無かつたか。

有馬。なんにもごはせん。死骸の口には女子の髪の毛らしいものを啣へて居りました。

西郷。女子の髪の毛を啣へて居つたか。

虎吉。それはこの間わたたくしが窃と届けてあげたのでございます。

西郷。お弓さんのか。

虎吉。(聲を濕ませて。)はい。

西郷。石村は東京へも歸らず、西郷とも一所に死なず、お弓さんと一所に死んだか。可愛い奴ぢやなう。

(上の方より森田金八郎出づ。)

森田。西郷さん。桐野と一所に前線をまはつて、明日は敵の總攻撃のあることを傳へますと、いよく最後の決戦ぢやと云うて、若い者どもは皆勇んで居りますわ。

西郷。さうか。みな元氣が好いなう。そこで、森田さん。あんたは熊本の約束を忘れやすまいな。

森田。たしかに覚えて居る。わたしはあんたと一所に死にます。

西郷。死ぬるのは勿論ぢやが、わしは決して戦はうとはせん。たゞ敵の弾の飛んで来る方へ進んで行くのぢや。いよく西郷が仆れたと見たならば、あんたすぐ介錯してくれんか。

森田。ようごはす。

西郷。介錯の役は石村と決めて居つたのぢやが、あれはもう生きて居らん。

森田。石村は生きて居らん。さうして死んだのでござるか。

西郷。まあ、それを詮議せんでも可い。兎もかくも介錯はあんたに頼みますぞ。

森田。ようごはす。引受けました。(お秀を見る。)やあ、濱津の奥さん。もうい
よく、お別れでござすぞ。

お秀。お名残惜うございます。

西郷。あんたに作つて貰ふた此の經帷子がいよく、明日のお役に立ちますわ。

(寢鳥のおどろき起つ羽搏きの音きこゆ。人々見かへる。)

濱津。なんぢやらう。鳥が騒ぐ。

西郷。あまりに月が好いので、鳥も途惑ひをしたのでござせう。森田さん。も
う寢ようか。

森田。寢ませう。(笑ふ。)地獄の夢でも見るかな。

西郷。あすは極樂でござすよ。森田さん。

森田。むむ。

西郷。(再び空を見る。)いゝ月ぢやござせんか。わしは今までこんなに澄んだ月

の光を見たことがない。真如の月ごいふのはこれでござせうな。

森田。(左のみ感ぜぬやうに。)さうかも知れませんな。

(西郷は空を指さして、濱津夫婦にも月を見よといふ。軍樂の音遠くきこゆ。幕。)

第四幕

(一)

岩崎谷、濱津屋敷の門前。下の方に大いなる士族屋敷の黒門を斜めに飾りて、
下の方より上の方の奥へ通ふ道路あり。門の左右は竹藪なり。所々に黄葉の
大樹ありて、正面の奥には畑地や森を隔て、城山の一部見ゆ。九月廿四日の
曉、あたりは一面の朝霧に掩はる。

……城山の月……

(暮あくど、小銃の音、喇叭の音きこゆ。門内より伊八は頬かむり、筒袖、身輕のこしらへにて出で、あたりを窺つてゐる。向ふより平田壯之助、上村源三、いづれも拔刀にて走り出づ。)

平田。無暗に撃ち居るな。

上村。氣をつけろ。

(二人は幾たびか地に伏して弾丸を避けながら奥の方へ走りゆく。)

伊八。まつたく無暗に撃つな。旦那様はどうなすつたかしら。

(奥の方より鰻屋音吉は、向ふ鉢巻、縄だすきにて走り出づ。)

音吉。(透し視る。)伊八さんぢやないか。さうも甚い霧だね。

伊八。こゝらは秋になると霧がひどいのだ。何しろ山間だからな。(空を見る。)

もう夜が明けさうなものだ。

(小銃の音つゞけて聞ゆ。)

音吉。あぶない、あぶない。こゝらへも無暗に飛んで来るぞ。

谷山。あ、やられたか。
(向ふより谷山盛彦、坂本宗平の二人は矢はり拔刀にて走り出で、門前に來りし時、坂本は彈丸にあたりて倒れる。)

坂本。やられた。残念ぢや。

(坂本は起きんとして又倒れる。音吉と伊八は走りよる。)

坂本。もういかん、いかん。

二人。しつかりなさい、しつかりなさい。

谷山。こゝはお前達に頼んだぞ。

(云ひ捨て、谷山は奥の方へ走りゆく。音吉と伊八は捨臺詞にて坂本を介抱しながら門前に連れ込む。奥より六松走り出で、門前にて呼ぶ。)

六松。奥さん、奥さん。

(門内よりお秀出づ。つゞいて伊八も出づ。)

六松。奥さん。こちらの旦那様がやられました。

……城山の月……

お秀。 え、旦那様が……。

伊八。 そ、それは何處で遣られたのだ。

六松。 こゝから四五町先の森の前で……。

お秀。 弾に中つたのでございますか。

六松。 なんでも胸のあたりを遣られたらしうございますよ。

お秀。 そんなら早く……。

(お秀は駈けて行かうとするを、伊八は遮る。)

伊八。 まあ、おあぶなうございます。旦那様はわたくしがお連れ申してまゐります。

六松。 あい、あい。案内してくれ。

(六松と伊八は奥の方へ走りゆく。小銃の音いよく、烈しく、お秀はうろた

ろしながら奥の方を窺つてゐる。門内より音吉出づ。)

音吉。 奥さん。そこらに出てるるとお危なうございますよ。

お秀。 旦那様が撃たれたさうで……。

音吉。 え、旦那様が……。そりや大變だ。伊八さんは何うしたらう。

お秀。 六松さんと一所に出で行きました。わたしも鳥渡行つて見て來ます。

(お秀は又行きかゝるを、音吉は引き留める。)

音吉。 いえ、あぶなうございます、あぶなうございます。

お秀。 でも、斯うしてはゐられません。放してください、放して下さい。

音吉。 いけません、いけません。奥さん、まあ、お待ちなさい。

(音吉は無理に宥めてお秀を門内に連れ込む。小銃の音つゞけて聞ゆ。霧はだん／＼に明るくなる。向ふより西郷隆盛は白木綿の紋附に袴を着け、大小をさし、扇を持ち出て出づ。そのあとより森田金八郎は抜刀にて出づ。つゞいて有馬銀之助、飯原勝彌、鮫島新七、いづれも抜刀にて附添うて出づ。花道の途中にて、西郷は右の股を撃たれて小膝をつく。)

森田。 あ、やられたか。西郷さん。

西郷。右の股を遣られた。

森田。もう好うごはすか。(介錯するかと訊く。)

西郷。いや、まだいかん。もつと正面まで出て討死せにやいかん。それでなければ本當の死様ぢやない。

(西郷は猶進んで舞臺のまん中に来る。有馬、飯原、鮫島は駈けぬけて、西郷の楯にならうとする。)

西郷。いや、楯になつてくれちやいかん。退いてくれ、退いてくれ。

(西郷は扇にて三人を押退けて、奥の方へ進まんとする時、小銃の音はけしく、人々は地に伏す。西郷一人は立つたるまゝにて進まんとして、彈丸に脇腹を撃たれて再び倒る。)

森田。(聲をかける。)西郷さん。まだでござはすか。

西郷。む。これで仕舞ぢや。金八どん。東京の方角はどつちでござはすな。

森田。東京は矢はり日の出る方角でござせう。(奥の方を指さす。)

(西郷は土に手をつき、形をあらためて奥の方に一禮す。)

西郷。これで可い。頼みますぞ。

森田。ようごはす。(刀を振上げて躊躇する。)(どうも往來ぢやいかん。(三人に。))
おい、先生をこゝの家へかゝへ込め。

三人。はあ。

(有馬、飯原、鮫島は西郷をかゝへ起さうとする。門内よりお秀走り出づ。つゞいて音吉も出づ。)

お秀。おゝ、先生も……。

音吉。早く内へお連れ申ませう。

(お秀と音吉は三人に手傳ひて、西郷を門内へかゝへ入れる時、向ふより虎吉走り出づ。)

虎吉。森田さん。旦那様は……。

森田。西郷さんは撃たれた。

……城山の月……

虎吉。え。

森田。おれと一所に來い。

(森田は門内に入る。虎吉もあわて、門内に入る。霧はいよく明るくなる。向ふより桐野利秋は小銃を持ち、兵士五人も小銃を持ちて走り出づ。)

桐野。(命令する。)折敷け。

(桐野も兵士も地に折敷きて、奥の方にむかつて小銃を亂射す。)

桐野。(再び命令する。)起て。

(桐野は先に立ちて進まんとする時、門内より森田出づ。)

森田。桐野さん。

桐野。(見かへる。)おゝ、森田。まだ死なんか。

森田。役目をすませたから、これからぢや。

桐野。西郷さん何うした。

森田。約束通りに介錯した。

桐野。では、西郷さん遣られたのか。

(兵士等もおどろく。門内より虎吉は西郷の首級を白布につゝみて抱へて出づ。あとより飯原と鮫島も出づ。)

虎吉。桐野さん、丁度よい所へ……。旦那様は……。(布に包みしまゝにて首級を見せる。)

桐野。(片手で拜む。)敵に見付からん所へ早う持つて行け。

虎吉。はい。

(虎吉は首級をかゝへて向ふへ走り去る。)

森田。(飯原等に。)貴公等は戦線をかけまはつて、西郷先生はもう戦死したと知らせて來い。

二人。はあ。

飯原。西郷先生は撃たれたぞ。先生は戦死なされたぞ。

鮫島。西郷先生は撃たれたぞ。先生は戦死なされたぞ。

(二人は同時に叫びながら、飯原は奥の方へ、鮫島は向ふへ走り去る。)
桐野。森田。(聲を揃へて。)西郷先生は撃たれたぞ。集まれ。あつまれ。
兵士一同。(同じく聲を揃へて。)あつまれ。集まれ。

(人々は四方にむかつて呼ぶ。やがて桐野は兵士等に指圖して門内に入る。
森田一人は門前に立つてゐる。奥の方にては「西郷先生は撃たれたぞ。」と呼ぶ聲々遠くきこゆ。やがて門内より有馬銀之助と兵士五人、それに音吉も手傳ひて、白布をかけたる西郷の死骸を疊に乗せて運び出づ。あとより桐野も附いて出づ。お秀は草花を持ち、お雪とお道も出づ。人々は死骸を地におろせば、桐野も坐る。森田も坐る。他の人々も無言にて、死骸を取圍みて坐る。お秀は涙ながらに草花をさゝける。
奥の方より飯原を先に立て、兵士十餘人走り出づ。向ふよりも鮫島を先に兵士七八人走り出づ。いづれも西郷の死骸を見て、一度に地に坐して手をつく。小銃の音、喇叭の音、正面の空だんくに薄紅くなる。幕。)

(11)

幕を閉ぢると、午後六時の鐘の聲きこゆ。それを打ち切ると、すぐに再び幕をあける。矢はり前におなじく、濱津屋敷の門前。城山没落より幾日か後の夕暮。水の音さびしく、落葉しきりに降る。

(旅僧西照は進藤勇吉の手をひきて立つ。勇吉は十六歳の盲目の少年、胡弓を脊負つてゐる。)

西照。(しづかに。)進藤さん。こゝが城山の岩崎谷、西郷さんの戦死なされた所ですぞ。

勇吉。(見えぬながらに見まはす。)では、こゝが岩崎谷でございますか。(ひざまづく。)

西照。さうです。西郷さんはこの濱津さんの屋敷の前で、弾にあたつて戦死な

されたのです。

勇吉。桐野さんも森田さんも……。

西照。その人達も西郷さんの最期を見まけて、思ひくりに戦死なされたと云ふことです。情はしいことぢやが、是非もない。あなたには判るまいが、この二月に來た時に比べると、鹿兒島の町もまるで變つてゐます。今度の戦争のために町は半分以上も焼かれてしまひました。

勇吉。半分以上も焼けましたか。

西照。縣廳も焼けました。私學校も焼けました。家をうしなつた者が何萬人とか云ふことです。いや、それでも家をうしなつた者は、新しく建て直す望みもあります。が、今度の戦争で命をうしなつた者は七千人以上だとか云ふことです。

勇吉。七千人……。怖ろしいことだと思いますな。(思はず地に坐る。)

西照。(共にひざまづく。)まつたく怖ろしい。その中には病氣で死んだ人もありませうが、兎もかくも此の二月に鹿兒島を出て行つた士族や私學校の生徒の中で

七千人あまりは若い命を西郷さんにさへけてしまつたのです。男ばかりでなく、女でもあなたの阿母さんのやうな人が幾人もあります。酷たらしいことも、悲しいことも、實に云ひやうも無い位です。

勇吉。それは誰が悪いのでせう。敵が悪いのでせうか、味方が悪いのでせうか。

西照。いや、敵もない、味方もない。誰が悪いのでもない。所詮一度は斯うならなければならなかつたのです。今度の戦争も決して無駄にはなりません。どの人も無益に血を流したわけではありません。これまで何かの機會を見て騒ぎ立てようとしてゐた士族の人達も、これでみんな鎮まります。西郷さんでさへも成功しなかつた戦ひを再び始めようとするやうな、無謀な者は恐らくありません。今まで劍や鐵砲で戦はうとした者が、これからは議論で戦ふことになります。劍や鐵砲が文章や演説に變ります。それだけでも非常の進歩ではありませんか。さうして、世の中がだんくくと文明に導かれて行くのです。

勇吉。成程さうかも知れません。

西照。いや、往來で飛んだ長話をしました。さあ、今日も既う暮れかよつて、山のあき風が身にしみて來ました。そろくとい行きませうか。

勇吉。はい。

西照。さあ、お起ちなさい。

勇吉。西郷先生がこゝでおなくなりなされたかと思ひますと、何だか動くのが忌になりました。

西照。(聲を濕ませる。)御道理です。では、進藤さん。西郷さんへ手向けのために、こゝであなたの胡弓をお聴かせ申しては何うです。

勇吉。さういたしませうか。

西照。それがあなたのお志です。さあ、お弾きなさい。

(西照は手傳ひて勇吉の脊より胡弓をおろせば、勇吉は立木の根もとに倚りかゝりて胡弓をひき始める。西照は立ちながらに聴いてゐる。門内より濱津の妻お秀、切髪にて珠數を持ちて出で來り、これも無言にて胡

弓を聴きすましてゐる。落葉しづかに降る。糸の音は次第に悲しく、西照もお秀も引き入れられたるやうに地にひざまづく。その中に、お秀は堪えかねて思はず泣く。この聲に西照は心づきて見かへる。勇吉も胡弓をやめる。) お秀。飛んだ御邪魔をいたして相濟みません。あまりに悲しいので思はず聲を立てました。

西照。われくこそ御門前で嘸ぞおやかましいことでもござりましたらう。

お秀。その御挨拶では恐れ入ります。實はわたくしどもに志す佛がございませうが、その胡弓が濟みましたら奥へ通つて御回向を願はれますまいか。

西照。承知いたしました。

勇吉。では、もう胡弓は止めませう。

お秀。(勇吉の顔をのぞく。)あなたは……。進藤さんの御子息ではございませんか。

勇吉。はい。進藤勇吉でございます。

お秀。わたくしは濱津應輔の家内でございます。見ればお目が御不自由のやうでございますな。

勇吉。熊本の戦ひで負傷しまして、両方の眼が潰れました。

お秀。(悼ましけに。)それはまあお可哀さうな。して、阿母さまは何うなされました。

勇吉。母も熊本で流れ弾にあたりまして……。

お秀。え。阿母さまも……。

西照。阿母さんは戦死、この勇吉さんは盲目、かさね々々お氣の毒のことでござります。西郷さんもひごく可哀さうに思はれて、その後は始終自分の手許に置かれたのでござりますが、日向の長井を立つ時に、眼の不自由なものを一所には連れて行かれないと云ふので、わたくしがお預かり申して別れました。

お秀。さうでございましたか。

西照。それから此のお子連れまして、一先づ鹿兒島へ戻つてまゐりましたが、

こゝも戦争の最中でどうすることも出来ません。その中にたうとう城山も没落しました。

(西照は嘆息する。お秀も涙を拭きながら聴いてゐる。)

西照。せめて其の戦場の跡をたづねて、西郷さんは勿論、その他の人々の御回向をいたしたいと、今日斯うして参つたのでござります。

お秀。それは御奇特のことでございます。では、あなたは以前から西郷先生を御存知でございましたか。

西照。はい。わたくしの師匠は京の清水寺の月照に申しまして、西郷さんとは深い御縁のある者でございます。

お秀。おゝ、あなたは月照さんのお弟子でございましたか。さういふ御縁のある方が御回向なされて下さりましたら、西郷先生も嘸ぞお喜びでございませう。

勇吉。して、こちらの御主人はどうなされました。
お秀。主人の應輔も西郷先生のお供をいたしました。

勇吉。では、やつぱりこゝで……。

お秀。はい、この廿四日の朝、戦死いたしました。

西照。それは、それは、何とも申上様もござりません。さう承はれば猶更のこと、すぐに参つて御回向申ませう。

お秀。何分お願い申します。

西照。西郷さんはこの邊で戦死なされたのでござりますな。

お秀。はい。丁度この門前でございました。

西照。左様でござりますか。

(西照はあたりを眺めてゐる。上の方の奥より西郷隆盛と稱する狂人、木の枝を持ちて傲然として出づ。)

狂人。どうだ。見ろ、見ろ。西郷隆盛は天へ昇つたぞ。

西照。え。(おどろいて見かへる。)

お秀。あれは氣狂ひでございます。

狂人。(空を指さす。)見ろ。西郷隆盛は天へ昇つて星になつたぞ。

西照。(おなじく空を見る。)おゝ、星が……。

勇吉。星が見えますか。

西照。宵の明星の隣に、長い尾をひいた彗星が鮮やかに見えます。

お秀。ほんに大きい彗星が……。あれは何といふ星でございませう。

狂人。西郷星だ、西郷星だ。

西照。西郷星……。(考へる。)進藤さん。

勇吉。はい。

西照。西郷さんの魂は、あの高いところに昇つてゐられるのかも知れませんが、わたし達もこゝで拜みます。あなたはその胡弓を弾いて、もう一度お聞かせ申してはごうですな。

勇吉。さういたしましたせう。

(勇吉は胡弓を把り直す。西照は空を仰いでゐる。)

狂人。天を見ろ、西郷星を見ろ。
(狂人は木の枝を杖にして傲然として立つ。勇吉は地に坐して再び胡弓をひく。西照とお秀は空を仰いで拜む。うすく水の音きこゆ。幕。)

小田原陣

登場人物

豊 臣 秀 吉
 淺 野 長 政
 石 田 三成
 増 田 長 盛
 長 堀 正 家
 野 村 彌 右衛門
 藤 井 彌 助
 松 丸

千 宗 谷
 伊 達 宗 政
 片 倉 小 十
 高 野 壺
 白 石 駿 河
 玉 川 久 五 郎
 松 山 甚 三 郎
 鹽 澤 五 兵 衛

ほかに歌舞妓の男女。魚屋。餅屋。侍女。小姓。政宗の家來。軍兵など。

第一幕

(一)

相州箱根の湯本宿、小田原の寄手陣門の體にて、上の方へよせて少しく斜めに柵矢來を結び、門内には陣幕を張りたり。長陣の商賣御免とありて、往來には魚を賣る露店あり。餅を賣る店あり。正面には青葉したる山々連なりて見ゆ。

(天正十八年六月六日の午後。陣門の前には軍兵一、二の二人は鐵砲を持つて立つ。魚屋の店には平次と平作が魚を切つてゐる。餅屋の店には女房おいと娘おさんが餅を焼いてゐる。その前には軍兵三、四、五の三人があぐらをかいて餅を食つてゐる。早川の水の音きこゆ。)

……小 田 原 陣……

おいね。 どうもお暑いことでございます。

軍兵三。 あつい、あつい。取分けて今日は暑さがひどいやうだ。

軍兵四。 何しろ梅雨晴れの俄天氣といふのだから、暑いのも無理はない。

平次。 (手を休める)昔から云ふ通り「ならばして見よ夏軍」で、まったくお察し申しますよ。

軍兵五。 察してくれ。この通り、汗びつしよりだ。

平作。 天氣になつたのは結構ですが、かう俄に暑くなると、生物をあつかつてゐる商賣はなかく心配でございます。

軍兵三。 (餅を食てながら)さうだらう。そこを見込んで値切り倒すかな。

平次。 どうぞお買ひください。せいぐお廉く致して置きます。

平作。 女のゐる店へばかり這入り込まないで、些とこつちへもお出で下さい。

軍兵四。 しかし斯う暑くなると生魚は氣がないな。その干物は十枚いくらだ。

平次。 四十文でございます。

軍兵五。 いくら陣中でも足もとを見て高いこをいふな。十枚でせいぐ十五文ぐらゐるものだ。

平次。 冗談云つてはいけません。これでも遠方から命がけて商賣に出てゐるのでございます。さうです、この鯉は……。

おいね。 (口を出す)おまへさんの店の鯉なんぞうっかり買へるものかね。

軍兵三。 まつたく貴様のまこころの鯉はあぶない。おれなどは此の通り、初めから

鉢巻をしてかゝつてゐるのだ。

平作。 どなたも口が悪いので困ります。

軍兵等。 はムムムムム。

(下の方より軍兵六、七の二人出づ。一人は西瓜を兩脇にかゝへ、一人は陣笠の中に真桑瓜を澤山入れて持つてゐる。)

軍兵六。 どうだ。暑いな。

(軍兵三、四、五は見かへる。)

……小田原陣……

軍兵三。 どうも暑いな。や、その西瓜や瓜はどこから持つて来た。

軍兵四。 畑あらしをすると、軍律がやかましいぞ。

軍兵六。 どうしてそんなことをするものか。すぐ其處へ百姓どもが店を出したのだ。

軍兵七。 百姓どもは正直だから、些と嚇せば廉く買へるぞ。

軍兵三、四、五。 どくだ、どくだ。

軍兵六。 (下の方を指さす。)すぐそこだ。大勢が買ひに来てゐるぞ。

軍兵三、四、五。 では、行かう、行かう。

おいね。 もし、もし、こちらの御勘定を願ひます。

おさん。 お三人で二十七文でございます。

軍兵三。 まあ、待て。あとで拂ふわ。

軍兵四、五。 早く行かう、行かう。

(軍兵三、四、五は下の方へ急ぎゆく。)

軍兵六。 まつたく此の西瓜は旨さうだな。

軍兵七。 暑い時にはこれが何よりだ。

軍兵一。 (聲をかける。)おい、おい。旨さうなものを買込んで来たな。

軍兵二。 けふは立番で何處へも出ることが出来ない。その西瓜と真桑瓜を少し分けて行つてくれ。

軍兵六。 それは困るな。おれ達の陣屋にも大勢が待つてゐるのだ。

軍兵一。 意地の悪いこゝを云はないで、西瓜を一つと真桑瓜を三つ四つ置いて行け。さつきから喉が渴いてならないのだ。

軍兵七。 折角だがお断りした。(下の方を見かへる。)あいつ等が買つて来たら分けて貰ふが可い。

軍兵二。 畜生。 どうしても渡さないか。(冗談に鐵砲を向ける。)

(軍兵六、七は西瓜と真桑瓜を楯にしながらから笑ふ。)

軍兵六。 さあ、撃て、撃て。

……小田原陣……

軍兵七。撃つて見ろ。

軍兵一。仕様のない奴等だ。(軍兵二に)構ふな、構ふな。

軍兵六。構はれて堪るものか。さあ、行かう。行かう。

軍兵二。さうで貴様達は敵の首は取れない奴等だ。

軍兵一。西瓜でも抱へて喜んでろ。

軍兵六、七。は。何とでも云へ。

(軍兵六、七は笑ひながら門内に入る。)

平作。(平次に)かう暑くなつて来ては、こつちの商賣は上つたりだな。

平次。明日からは干物や錫ばかりを列べることしようか。

おいね。西瓜や真桑瓜が出盛るやうになると、餅屋の商賣もむづかしい。

おさん。こつちの店でも明日からは甘酒でも賣らうかしら。

おいね。それが可いかも知れないよ。

平次。それでもそつちの店にはおさん坊といふ看板娘がゐるから可いのさ。

平作。どこへ行つても女でなければ夜が明けない。まったく關白様が好いお手

本だ。

平次。おいね。(あわて)叱つ。

(平作は頭を押へる。軍兵一は進みよる。)

軍兵一。これ、これ、魚屋。

平次。はい、はい。

軍兵一。あとで其の鯉二匹と干物二十枚ばかりを、おれ達の陣屋へ持つて来い。

平次。はい、はい。かしこまりました。

軍兵一。その代金は今の關白様と差引だぞ。

平次。やあ。

軍兵二。それで内分にして遣るから、有難いと思へ。

平次。はい、はい。ありがとうございました。

(平次と平作は顔を見あはせる。おいねとおさんは笑つてゐる。水の音。蟬

……小田原陣……

の聲。

軍兵一。(空を仰ぐ。)ごうも暑いな。
平次。 鯉二匹と干物二十枚でいよく暑くなりました。(汗を拭いてゐる。)

(向ふより伊達左京大夫政宗、二十四歳、右の眼盲たる荒男、大童の髪を襟束ねにして旅姿。そのあとより片倉小十郎景綱、三十一歳、腰には笛をさして出づ。政宗一行の風俗、諸人が眼を側つるほどに疎野なりと知るべし。)

政宗。(途中にて。)こゝが湯本の宿であらうな。
片倉。 いかにも此處が箱根の入口といふ湯本の宿でござる。あれ、あすこに陣門が見えまする。

政宗。 思うたよりも用心嚴重ぢやな。(行きかゝる。)

片倉。 殿。
政宗。(立停まる。)なんぢや。
片倉。 これからが安宅の關、大事の場所でござりますぞ。それがしが武藏坊

の役目つかまつる。殿にはあとに引退つてお越しなされ。

政宗。 われらは作り山伏でない。唯ありのまゝに伊達政宗と名乗つて通ればよいのぢや。あとも先もあらうかい。

(政宗はつかくと舞臺に來る。片倉もついて來る。魚屋、餅屋の者どもは袖をひき合せて政宗等を不思議さうに視る。軍兵一、二も身がまへして二人の舉動をうかゞひる。)

片倉。(再び聲をかける。)殿。われくが無事に陣門を通つてからが、あとの人々がおくれば面倒。しばらくこれにてお待ち合せくだされ。

政宗。 むゝ。(餘儀なく立停まる。)

(下の方より軍兵三、四、五は西瓜や眞桑瓜をかゝへて出で、政宗等の姿を見て矢はり不思議さうに眺めてゐる。片倉はそれと見て聲をかける。)

片倉。 方々は寄手の衆と見申した。就てはお尋ね申したいことがござる。當城の寄手は大手搦手あはせて何萬騎でござりませうな。

……小田原陣……

軍兵三。(相手を輕蔑するやうに。)お身達はそれ聞いて何とする。

片倉。何とするでもござらぬ。たゞ心得のために承はりたいのでござる。われらの見積りでは十萬騎以上……違ひますかな。

軍兵四。(冷笑ふ。)は、それでは三分一にも足らぬわ。

政宗。(進みよる。)十萬騎では三分一にも足らぬといふ。では、三十萬以上もござるかな。

軍兵五。(誇るやうに。)船手をあはせたら三十二三萬もあらうかなう。

政宗。三十二三萬……(片倉と顔を見あはせる。)

(この問答の中に、軍兵一と二とはさゝやき合ひて、軍兵一は門内に入る。)

片倉。して、城内の小田原衆はどれほどの人數でござるな。

軍兵三。城方は確と判らぬが、先づ五六萬もあらうかといふ見積りぢや。

片倉。五六萬でござるか。

軍兵四。さあ、行かう、行かう。

片倉。して、その固めの口々は。

軍兵五。行かう。行かう。

(軍兵等は相手にならずして門内に入る。)

政宗。寄手は三十二三萬、城方は五六萬……。かうなつてはもう半年かな。

片倉。いや、この秋までには大方埒が明きませうぞ。

政宗。む、(考へてゐる。)

おいね。(聲をかける。)もし、かちんをおあがりなされませぬか。

政宗。(見かへる。)お、餅屋か。餅は欲うない、湯をくれ。

おさん。なんと仰しやります。

片倉。は、われらの奥州訛りが判らぬか。殿には白湯を所望と仰せらるゝの

ぢや。

おいね。はい、はい。判りましてございます。

(おいねは二つの茶碗に湯をつぎ、おさんは盆に乗せて持つて出で、政宗と

片倉にすゝめる。

平次。失禮ながらお前様方はどちらからお越しになりましたのでございます。

片倉。われらは奥州から上つたものぢや。

平作。はあ、奥州でございますか。

片倉。(笑ふ。)われらの姿が不思議に見ゆるかなう。

政宗。(笑ふ。)上方勢を見馴れた彼等の眼には、定めて異様に見ゆるであらうよ。

其方とわれらと立列んだところは、さながらの貞任宗任ぢや。

片倉。まつたく左様かも知れませぬ。

(門内より軍兵一と二を先に立て、野村彌一右衛門は軍兵十數人を連れて出づ。)

野村。そこな衆、いづ方よりまゐられた。

片倉。(進み出づ。)われらは……。

野村。(聞き咎める。)何、われらぢや。

片倉。(あわてゝ云ひ直す。)いや、失禮御免ください。それがしは奥州の伊達の家來、片倉小十郎景綱。主人左京大夫政宗の供して上りました。

野村。(二人をぢろく視る。)むゝ、伊達衆か。して、主人の政宗はいづれにござる。

政宗。(進み出づ。)それがしが政宗でござる。

野村。え。(再び政宗を屹と視る。)お身が政宗……。たしかに伊達どのか。

政宗。まぎれもない政宗でござる。

野村。むゝ。(まだ疑ふやうに政宗を眺めてゐる。)して、わづかに上下二人でござるか。

政宗。いや、ほかにも家來少々召連れてまゐつた。やがてあとより追ひ着いでござらう。兎にもかくにも政宗參陣の趣、然るべく御取次ぎください。

野村。心得申した。しばらく其處にお控へめされ。

(政宗と片倉は會釋す。野村は軍兵を連れて門内に入る。二人は無言にてた

……小 田 原 陣……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

とすむ。向ふより高野壹岐、五十餘歳。白石駿河、三十餘歳。玉川久五郎、松山甚三郎、鹽澤五兵衛、いづれも旅姿にて出づ。あこより家來四人は唐櫃二つを荷ひ、家來八人は槍と鐵砲を持ち出て出づ。

高野。殿にはお早い御着、われら老足のおくれて相濟みませぬ。

白石。壹岐殿ばかりでない。われくまでが打揃うて遅着、申譯もござらぬ。

政宗。いや、われらは心が急くので小十郎とたゞ二人、遮二無二路をいそいで

まゐつた。これで人数はみな揃うたか。

玉川。みな打揃うて居りまする。

片倉。炎天の道中、いづれも渴いたことござらう。(餅屋を指さす)それにて

湯でも参られてはどうぢやな。

政宗。さうぢや。空は此のやうに晴れて居つても、これからの我々の身の上、

雨となるやら風となるやら判らぬ。まづ湯でも飲んでゆるくと休息いたせ。

一同。はあ。

松山。(餅屋に)これ、白湯を所望するぞ。

おいね。おさん。はい、はい。

(おいねおさんは一同に湯を汲んで出す。家來は唐櫃を据ゑ、政宗はそれに腰をかける。人々は湯を飲む。)

高野。海道一の難所といふ箱根山も、来て見れば左のみでもないやうぢやな。

白石。いや、こゝは麓。これからが上り下り八里の難所といふことぢや。

高野。その要害を敵に渡して、おめくと居縮みになつてしまつた北條の軍配、

これこそ思つたやうでもないやうぢやな。

白石。早雲以來の名家ぢやが、やはり運の竭くる時節かな。

玉川。もとより長陣とは申しながら、敵も味方もたゞ睨み合ひでござらうか。

貝の音も聞えませぬわ。

政宗。(笑ふ)流石は久五郎ぢや。好う氣がついたな。われらも先刻から然う思つてゐたのぢや。いかに長陣ぢやと云うて、をりくには貝の音、関の聲をあけ

て、敵を疲らす工夫が無うてはなるまいに、上方勢の軍の仕方、あまりに優長に見ゆるでないか。

片倉。いや、優長とばかりでもござるまい。斯様に四方を取圍んだ上は、城中の者どもは網の魚ぢや。能はぬ屏を乗らんとし、及ばぬ堀を越えんとして、無益に人数を損するよりも、敵を兵糧攻にして飢殺す手だてと見申した。

政宗。城方はなぜ必死で討つて出ぬかなう。

片倉。いかに必死と申しても、所詮勝目のない軍では、なか／＼討て出らるゝものでござらぬ。

政宗。それもさうぢやが、何やら齒痒い。いや、齒痒いといへば、われ／＼をいつまでこゝに待たすのか。久五郎。

玉川。はあ。

政宗。その方参つて催促いたせ。

玉川。はあ。

政宗。(稍急いで。)政宗主従を通すか通さぬか。しかと聞き糺してまわれ。

玉川。かしこまりました。

(玉川は門内に入る。政宗は起ちあがる。)

政宗。皆聞け。國許出發の砌りより覺悟のあること、今更あらためて申聞かすにも及ばぬが、われら主従はいよく生死の瀬戸際まで漕ぎ着けた。關白の陣所に参着して、首尾よく相濟めば好し、左もなくば政宗は勿論のこと、これにある者ども一人も生きては歸られまい。箱根の山は死出の山ぢや。まさかの時にうるたへて、奥州武士の面を汚すな。

一同。はあ。

高野。仰せの通り、國許出發の砌りより我人ともに覺悟のあること、今更うるたへ慌つる筈はござらぬ。憚りながら御安心遊ばされい。

松山。もとより必死の覺悟で御供致してまるつた我々でござる。

鹽澤。たとひ地獄の底に沈まうとも、些とも恐るゝことではござらぬ。

片倉。 おのくの覺悟いかにも頼もしく見え申すが、みちくも申す通り、かへすくも短慮は無用ぢや。いざといふ大事の鏑際までは、必ずおとなしうしてゐられい。

(高野と白石を除きて、他の若侍等は頭を下げる。門内より玉川久五郎は足早に出づ。)

玉川。 殿。

(その聲のあわたゞしきに、人々は眼をあつめて屹と視る。)

玉川。 われらが參つて催促いたせし處、御不審のかゝりし伊達の主従、眞直に通すこと相成らぬとの返答でござりました。

政宗。 なに、眞直には通さぬ……。一同。 通さぬと申すか。

(片倉一人は黙して思案す。)

高野。 通さぬとて此のまゝにも歸られまい。

政宗。 小十郎の分別はどうぢやな。

片倉。 (しづかに。)この上は是非がござらぬ。つまりが双方の根比べぢや。

政宗。 (聞き返す。)根くらべぢや……。

片倉。 この陣門の外に野宿して三日が十日、十五日が一月でも、根氣よく待つてゐるより外はござらぬ。見られい。長陣の商賣御免とあつて、こゝらには魚屋もある、餅屋もある。われく十人二十人が飢死するやうなことはござるまい。

白石。 して、その上で何とならうかな。

片倉。 それは判らぬ。くさくも云ふ通り、所詮は命を捨つると覺悟したら、先のことの詮議は要るまい。すべてが臨機應變ぢや。殿も方々も先づ落付いてゐられい。

(一同はまだ不安らしく、顔を見あはせてゐる。政宗は無言にて再び唐櫃に腰を下す。門内より華やかに粧うたる歌舞妓の女三人出で來り、政宗主従を不思議さうに見かへりながら下の方にゆく。こなたにても珍しげに見送る。)

片倉。(餅屋の店に立寄る。)今の湯の代ぢや。われらは旅の者ぢやで土地の勝手を知らぬ。これでよいかな。(錢をやる。)

おいね。ありがとうございます。

片倉。唯今通つた女子ごもは何ぢや。

おさん。歌舞妓の衆でございます。

片倉。おゝ、歌舞妓の者どもか。

平次。(進み出づ。)今うけたまはつて居りますれば、こゝらに野宿をなさるとやら。其節は何分御用をねがひます。

平作。生の魚、干した魚、なんでもお好み次第にございます。

片倉。あるひは厄介にならぬとも限らぬ。その節には頼むぞ。

平次。平作。ありがとうございます。

おいね。わたくしの店でも餅ばかりではござりません。強飯も焚いて差上げます。

片倉。さうか。それも頼むかも知れぬ。

おさん。明日からは甘酒も沸します。

片倉。(少し煩さくなつて。)さうか、さうか。

(下の方より百姓一人、西瓜の荷をかつぎて出づ。)

百姓。もし、殿様方。西瓜の新しいのをお召し下さいませんか。

松山。いらぬ、いらぬ。

百姓。でも、これは唯つた今、畑から取つて来たばかりでございます。

鹽澤。なんでもよい。いらぬと云ふに……。

百姓。(強情に。)でも、一つお召し下さいませんか。あちらの御陣でも四つ五つ賣つてまるつたのでございます。お暑い時にはこれに限りませす。もし、殿様。

(百姓は西瓜一つをさゝけて人々にすゝめ、最後に政宗の前に持つてゆく。政宗は無言にてその西瓜を鐵扇にて礮と打てば、西瓜は眞二つに割れる。百姓はおごろいて尻餅をつく。)

玉川。無禮者め。退れ、退れ。

百姓。はい、はい。(呆々の體にて行きかゝる。)

片倉。これ、錢をやるぞ。

百姓。はい、はい。ありがたうございます。

(百姓は錢を貰ひて早々に下の方へ逃げてゆく。)

片倉。(西瓜を見て。)これも百姓どもが汗を流して作ったものぢや。いたづらに捨つるも惜い。(うしろに向ひて。)誰かこの西瓜を拾はぬか。

平次。おいね。はい、はい。(あわてゝ駆け出でゝ西瓜を拾ふ。)ありがたうございます。

(門内より野村彌一右衛門は軍兵を連れて再び出づ。軍兵等の持つたる鐵砲はいづれも口火繩に火をつけたり。それと見て、玉川はあわてゝ政宗の前に立塞がる。政宗も起つ。他の人々も素破やと身構へする。)

野村。伊達衆に申す。唯今の御催促も一應御道理、就てはあらためて評議の上、兎もかくも陣門をお通し申すぞ。

玉川。おゝ、お通し下さるか。

野村。但し其のまゝでお通し申すことは相成らぬ。おのくの腰の物は格別、その他の槍鐵砲のたぐひは悉く當方にお渡しくだされ。

一同。え。

政宗。(不満らしく。)槍鐵砲を渡せと云はるゝか。

野村。左様でござる。餘人は知らず、御不審のかゝりし伊達衆を、飛道具のたぐひ持參のまゝではお通し申されぬ。但し其儀御不承知か。

政宗。不承知ではござらぬが……。

(政宗はまだ澁つてゐる。片倉は進んで其袂をひく。)

政宗。(澁々ながら首肯く。)では、仰せに任せてお渡し申す。(家來を見かへる。)

一同。はあ。

(家來共も澁々ながら槍鐵砲を渡すを、松山と鹽澤は一つにまこめて野村の

前に持つてゆく。

野村。短筒の御所持はあるまいな。

政宗。(やゝ捨鉢に。)お疑ひあらば身のまはりから懐ろまで一々におあらため下され。

野村。いや、左までにも及び申すまい。然らば一同お通りあれ。

政宗。御案内お頼み申す。

(政宗は會釋する。一同は不満ながら其後についてゆく。)

(二)

箱根山中の太閤風呂。温泉の湧き出づる風呂は上の方の奥にある心にて、舞臺には三方に美しき幔幕又は小袖幕を張りまはし、内には毛氈をしきて、下の方の隅には茶の湯の釜を据ゑてあり。幕のうしろには青葉の大樹しけりて

夏の日を遮れり。

(おなじ日の午後。秀吉の妾松の丸は毛氈の上に坐り、そのうしろに美しく着飾りたる侍女四人、下の方には歌舞妓の女二人、これも華やかに粧ひて控へる。釜の前には利休の弟子宗谷が茶を立てゝる。水の音うすく聞ゆ。)

松の丸。宗谷の。お茶は宜しうござりまするか。

宗谷。やがて服加減に相成りまする。

松の丸。上様にはお風呂も済む刻限でござりまする。すぐに差上げぬと御機嫌を損じませうぞ。

宗谷。かしこまりました。

(下の方より石田三成、陣中に似合はしからぬ優美の服装にて、家來二人を引連れて出づ。)

石田。(幕の外にて)申上げまする。

(侍女の一人起つて出づ。)

……小田原陣……

侍女一。石田いしだごのでござりましたか。

石田。上様うへさまにはまだお風呂ふろは相濟あひすみませぬかな。

侍女一。まだおあがりになりませぬ。

石田。左様さやうでござるか。(少すこしく躊躇ちゆうちよする。)

松の丸。(聲こゑをかける。)石田いしだどのか。やがて御對面ごたいめんなされませう。先まづこれへお通まほりなされ。

石田。然しからば御ごめん下くだされ。

(家來けらいは下しもの方かたに去さる。石田いしだは幕まくの内うちに入りて、松の丸まつまるに會釋あひやくす。一同どうも石田いしだに會釋あひやくす。)

松の丸。降ふりつゞいたる五月雨さみだれもやうく晴はれたかと思おもへば、俄にはかに暑あつうなりまし
たな。

石田。梅雨つゆ明けの暑あつさは一入身しほみに堪こたへます。しかし麓ふもととは違ちがうて、こゝらは
山やまも深ふかうござれば、青葉あをばを渡わたる風かぜも涼すずしく、夏なつを知らぬけに見みえまする。

松の丸。この山やまに温泉いでゆの湧わくところも數々かずかずあれど、こゝが上様うへさまの御意ごいにかなひ、

わざく石風呂いしがらふを作つくらせて、三日かに一度ひとづつは必かならず湯ゆあみにお越こし遊あそばすので、
わたくし共とももお供ともを樂たのしにして居をりまする。

石田。われわれくもお相あ伴はんいたしたけれど、何なにかと御用ごようの忙せはしければ、殘念ざんねんなが
ら減多めったにお供ともはかなひませぬ。

歌舞妓一。では、今日こんにちは御用ごようの暇ひまを見て、わざくお越こしになりましたか。

石田。いや、今日こんにちはお風呂ふろのお相あ伴はんではござらぬ。少すこしく言上ごんじやういたしたき儀ぎが
ござつて……。淺野あさの彈正だんじやうもやがて參まゐるでござらう。

歌舞妓二。何か御用ごようとござりますれば、わたくしわたくしもは御遠慮ごえんりよ申まをしませうか。

石田。さあ。(松の丸まつまるの顔かほを見る。)

松の丸。何なにかは知らねしぎ、上様うへさま御意ごいのあるまでは先まづ其儘そのまゝにしてゐて可よからう。
歌舞妓。はあ。

(下しもの方かたより淺野あさのの家來けらい藤井彌助ふじやう出いづ。)

藤井。(幕の外にて。)御案内。

侍女二。(起つて出づ。)どなたでござりまする。

藤井。浅野長政の家來、主人の使として罷り出ました。

石田。(起つて出づ。)浅野殿の御家來衆か。上様いまだ御出座に相成り申さぬ。

今しばらくお控へ下されと御主人に傳へられい。

藤井。はあ。

(藤井は會釋して行きかゝるを、石田は呼び止める。)

石田。御前の首尾よろしくば、それがしの家來を迎へに遣はす。それまでは彼

の者を案内すること無用と申されい。

藤井。心得ました。(下の方に去る。)

松の丸。石田ごの。なにか御目見得の者でもござりまするか。

石田。いかにも浅野が取りなしにて……。併し首尾よく御目見得が叶ふやら

……。

宗谷。(見かへる。)して、それは誰でござりまするな。

石田。はて、お身達がいらぬ差出口、いづれ御前にて御披露申す。

(上の方の幕のかけより豊臣秀吉は白の帷子に緋の名古屋帯をしめ、湯あがりの姿、侍女五人に圍まれて出づ。堀三十郎は太刀をさゝけ、ほかに小姓三人は大團扇を持ちて従ふ。一同は形をあらためて、敬禮す。)

秀吉。治部少輔、來たか。

石田。はあ。

秀吉。よい天氣になつたなう。

石田。陣中では上様日和と申して、みな喜んで居りまする。

秀吉。この頃のやうにじめくと降りつゞいては何うもならぬ。氣が減入つて面白くない。今日の俄天氣で晴々したわ。

石田。今年の梅雨もこれで終りでござりませう。

秀吉。(一座を見渡す。誰も彼も今日は暑いと大儀さうに云うてるが、所詮夏

は暑いに決つたものぢや。今も云ふ通り、じめくと陰氣に降りつゞく日よりも、一天雲なく晴れ渡つて、焼くるやうに暑い日の方が晴々して心持が好い。(小姓を見かへる。)湯あがりて汗が収まらぬ。煽け、煽け。

小姓 是あ。

(小姓三人は左右と背後より大團扇にて秀吉を煽ぐ。)

秀吉 宗谷。茶の加減はどうぢや。

宗谷 唯今差上げます。

(宗谷は茶碗をさくけて出づ。)

秀吉 (茶を飲む。)おゝ、いつもながら加減は上々ぢや。流石は千家の弟子だけあるぞ。

宗谷 恐れ入つてござりまする。

松の丸 石田殿が何か言上したい儀があると云ひ、つゞいて淺野殿も参らるゝとやら。わたくし共は御遠慮申上げませうか。

秀吉 (少し考へる。)治部少輔、なんぢや。内密の儀か。

石田 實は奥州の者がまゐりまして……。

秀吉 奥州の者……。おゝ、政宗が来たか。(松の丸に)それならば遠慮に及ばぬ。そちも茶の相伴でもしながら聽いて居れ。

松の丸 是あ。

秀吉 して、政宗はどこにゐる。

石田 先刻湯本の宿まで参着いたしましたので、槍鐵砲を取上げて兎もかくも陣門を通行させ、太平臺に野陣させて置きました。

秀吉 供の人数は何程ぢや。

石田 上下百餘人で國許を出ましたさうでござりまするが、途中の關所關所で留められ、又は病氣等で後れし者もあり、唯今では僅に十七八人でござりまする。

秀吉 十七八人……。 (考へる。)上下百餘人で國を出たと申すな。

石田 是あ。

秀吉。政宗といふ奴、思ふにも優した曲者ぢやな。

石田。え。

秀吉。なぜと云へ。たとひ奥州の荒夷とは云ひながら、代々將軍の一字を賜はるほどの名家、領分も陸奥半ヶ國と出羽とに跨がつて、百二十萬石の取高き見た。それほごの者が秀吉の旗にむかつて一矢射ようとせす、わが身を防ぐにも足らぬ小人數で、おとなしくこゝへ参り着くとは、なみくの者では逆もなることでない。(罵るやうに。)かへすくも油斷のならぬ奴ぢや。して、その政宗の面付はどうぢや。

石田。仰せの通り、名家の嫡流は申しながら、奥州の邊土に生ひ立ちましたれば、型のごとくの荒夷、丈拔群にして色黒く、しかも片眼盲たる形相、なにやら物すごくも相見えまする。

秀吉。さうか。(うなづく。)さうであらう。年はまだ若いな。

石田。しかとは存じませぬが、淺野は二十四五歳ぢやとか申して居りました。

秀吉。その二十四五歳で、二本松をほろほし、須賀川を切り従へ、福島、會津までも乗つ取るごは、いよく以て油斷のならぬ悪戯者ぢや。(舌打して。)おのれ、さうして呉れうかなう。

(石田は黙してゐる。宗谷は茶を立て、松の丸にすゝめる。秀吉も黙して思案してゐる。蟬の聲きこゆ。)

秀吉。(やがて小姓を見かへる。)ばさくさうるさい。もう團扇を止めい。

小姓。はあ。(團扇をやめる。)

秀吉。今度の小田原攻めは去年からの催しで、日本中の大小名、當三月までにはことごとく着到せよと觸れ渡してあるに、政宗めは容易に踏み出さず、六月になつてやうやく身一つで参るとは、それだけでも軍令違犯の罪はある。むゝ、いっつそ腹を切らすかな。

(一座の人々おどろきて秀吉の顔を見る。石田のみは靜かに聽いてゐる。)
秀吉。(又考へる。)とは云ふものゝ、捨身になつて秀吉の懐ろへ飛び込んで来た

奴。憎いも憎いが、可愛いところもある。

石田。恐れながら三成の意見を申上げますれば、彼の政宗は古への貞任宗任にも劣らぬもの。何分にも國は遠し、領分は廣し、おのづと上様の御威光もどいかに勝かとも存じられます。それを幸ひに惡戯我儘が増長して、手當り次第に北を攻め、あるひは南を切取つて、奥羽二ヶ國を騒がして居りましたは、天下御統の御趣意にも背き、民百姓の難澁も思ひやられます。まして彼が勢ひに乗じて、常陸下野のあたりまでも押出してまゐりましたら、第二の小田原攻めを繰返すやうな大事に相成らうも知れませぬ。

秀吉。むむ。(考へる。)それほどのことは仕兼ねぬ奴ぢや。

石田。小人数でこの陣中へまるつたを幸ひに、やはり思召の通り……。 (秀吉の顔を見る。) 他の見せしめもござりますれば……。

秀吉。他の見せしめ……。それもさうぢやが……。 (又考へる。)

(下の方より淺野彈正長政、具足に陣羽織を着て出づ。)

淺野。(幕の外にて。) 御案内。

(侍女三は起つて出づ。)

淺野。上様、もはや御出座でござるか。淺野が伺候いたしたと御取次ぎくださ

れ。
侍女三。かしこまりました。(引返して來る。)

秀吉。誰ぢや、來たのは……。

侍女三。淺野どのでござりまする。

秀吉。おゝ、彈正か。

(秀吉は頗にて指圖すれば、侍女は再び幕の外に出づ。)

侍女三。すぐにお通り下さりませ。

淺野。御免。(幕の内に入る。)

秀吉。彈正。具足では暑からうな。

淺野。いや、着馴れて居りますれば左のみにも覚えませぬ。

……小田原陣……

秀吉。(笑ふ)は、強情な奴め。して、何しにまゐつた。

浅野。先刻より途中に控へて、石田の迎へを相待ち居りましたが、今に何の沙汰もござりませねば、待兼ねて参上いたしました。(石田に)治部少輔、彼の者の儀を上様に言上めされたか。

石田。委細言上いたした。

浅野。言上されたらば、なぜ早うそれがしに沙汰をせられぬ。彼の主従は勿論、われくまでが先刻から路傍に立ち暮して居つたわ。

秀吉。いや。石田を責むるな。第一に予の分別が海とも山ともまだ決まらぬからぢや。政宗は上下十七八人、それに相違ないな。

浅野。主人政宗のほか、片倉小十郎、高野壹岐、白石駿河、玉川久五郎、松山甚三郎、鹽澤五兵衛、他に若侍十三人でござりまする。

秀吉。その片倉といふ奴はおれも名を識つてゐる。どんな奴ぢや。

浅野。年のころは三十前後、口も好う利きまして、なか／＼賢しげに見えます

る。

秀吉。は、面白い。彼等が秀吉の前で何のやうな口を利くか。試して見ようかな。

浅野。然らばすぐにこれへ召連れませうか。

石田。いや、それはなりません。たとひ御對面を許さるゝとしても、御不審のかゝつた政宗主従、斯様な場所では……。

秀吉。いや、それは構はぬ。政宗めに腹切らさうと思へば、すぐにもこれへ呼び出して、わが眼の前で仕置をする。が、くさくも云ふやうぢやが、捨身で飛び込んだ来た奴を殺すも不憚、さりとて後日の禍にもなりさうな奴、ごうしてくれうかと思案してゐるのぢや。

石田。一旦の御憐愍は後日の禍、そこをよく／＼御思案なされまして……。

浅野。(向き直る)さては治部少輔、お身は政宗成敗の儀を上様におすゝめ申すか。

石田。いかにも三成おすゝめ申した。後日の禍は扱措いて、當御陣參着を三月中と固く觸れ置いたに、唯今にいたりての着到、これだけでも軍令違犯の罪は逃れ申すまい。まだ其上に會津の芦名は、今の義廣が父の代より上様には再々の御禮を申せしもの、それらの斟酌もなく無二無三に攻め破つて、あまつさへ其居城の黒川を我物にする……。

秀吉。それ、それぢやよ。あの政宗の小童め。われに一言の許しをも乞はずして、妄りに會津の芦名を攻めほろほすなど、重々不届至極の奴ぢや。ひねり殺すより外はないかな。

淺野。お詞を返すは恐れ入りますが、政宗が着到延引のこと、又は會津を攻め破りしこと、當人どもの身に取りましては相當の中開きがないとも限りませぬ。九州の島津、四國の長曾我部、いづれも一旦は敵對いたしたれど、降参の上は御赦免の御恩を蒙つてござりまする。まして政宗、たとひ國許に於て不届の事もがござりませうとも、上様御旗に對して弓をひいたと云ふでもござりませぬ。延

引ながらも少々の人數を召連れて、おとなしくお膝下へまゐりしからは、格別の御憐愍然るべく存じまする。それが却つて御威光を増す道理。籠の鳥ならでは捻り得ぬ卑怯者の申すことなど、一向御取上げなきやうに、長政折入つてお願ひ申しまする。

石田。彈正、今一度云うて見られい。籠の鳥ならでは捻り得ぬとは、上様に對しての過言か、但しはこの三成への當てござりか。卑怯者とは誰がことでござるも。それ明白にうけたまはりたい。

淺野。(冷笑ふ。)お身はそれを聞きたいか。
石田。いかにも確と承はりたい。お身とそれがしとは御側御用人を相勤むる身の上、その相役の三成に對して、籠の鳥ならでは捻り得ぬ卑怯者と云ふからは、それだけの仔細がなうては叶ふまい。それ承はらう、眞直に申されい。

淺野。おゝ、云へばならば云うて聞かさう。そもくお身は……。
松の丸。(遮る。)あ、これ、彈正殿、治部少輔どの、御前でござりまするぞ。お控

へなされぬか。

二人。 はあ。

秀吉。(笑ひながら。)いや、構ふな、構ふな。二人が争ひも所詮は我が爲を思うての忠勤からぢや。たがひに云ふだけのことを云はせて置け。

松の丸。でも、この上に云ひ募りましては、第一上様に御無禮、また二つには平生の宿意がいよく重なりましては……。

秀吉。平生の宿意……。(浅野と石田の顔を見る。)そのやうなことのあらう筈はあるまい。

二人。(曖昧に。)はあ。

秀吉。今度のことは予にも分別が付けにくうなつた。兎もかくも政宗めを一應吟味して、赦すも赦さぬも扱その上のごぢや。

二人。 はあ。

秀吉。その申聞きが立てば格別、立たねばすぐに切腹申付くる。先づそれまで

は秀吉に對面無用と申聞かせて、どごぞに暫らく謹慎させて置け。

浅野。 して、いづ方に留め置きませうか。確と御指圖願はしう存じまするが……。

秀吉。 政宗は太平臺にゐると申したな。

浅野。 はあ。

秀吉。 では、底倉へ行けと申せ。

石田。 仰せではござりますが、底倉では此のお風呂から餘り遠くもござりませぬ。そこへ彼等を差置きましたは……。

秀吉。 はて、その懸念には及ばぬ。どこに置いても同じことぢや。

浅野。 しかし底倉のあたりは先頃のいくさ火に焼かれまして、住むべき家もござりませぬ。

秀吉。 家が無くば野陣ぢや。それでも放し飼にさるゝ方が彼等の仕合せであらうよ。

浅野。 はあ。

……小田原陣……

秀吉。それで決まつた。暮れぬ中に陣屋へ戻らうかな。
一同。はあ。

(一匹の蟲飛んで秀吉の鼻の先へ来るを、秀吉は扇にて打落す。)

松の丸。おゝ、大きい蟲が……。

三十郎。(覗く。)それは虻でござりまする。

秀吉。おゝ、虻ぢや。ひねり殺すまでもなく一撃ぢや。

(浅野と石田は思ひ／＼に考へる。)

秀吉。これ、歌舞妓の者。

歌舞妓。はあ。

秀吉。長陣は退屈でならぬ。今夜も何か面白い舞を見せてくれ。

歌舞妓。かしこまりました。

秀吉。さあ、松の丸。行かう。

(秀吉は松の丸の手を取つて起たうとしてよろめく。)

松の丸。あれ、おあぶなうござりまする。

秀吉。なに、大丈夫ぢや(謔ふ。)その時、義經少しも騒がず……。はゝゝゝゝゝ

(秀吉は起つ。一同は敬禮す。幕。)

第一二幕

箱根山中、底倉の谷間。上の方には絶壁をうしろにし、杉の大樹をそのままの柱にしたる粗木作りの小屋あり。家の内は土間にて、あら庭二三枚をしきたり。木の幹を切りたる腰掛け二三脚あり、上の方には唐櫃二つを置きたり。政宗は底倉に謹慎を命ぜられたれど、雨露を凌ぐべき家もなければ、そこらの樹木を伐り出して新しく作れる假屋と知るべし。下の方は蛇骨川にて、舞臺の奥より流れ落つる山川は、小屋の前を過ぎて上の方へながれゆく。川を

隔てたる下の方は高き崖路にて、川の中には人の渡るべき大小の石あり。あたりには熊笹、山百合、齒菜、その他の灌木雜草一面に生ひ茂れり、小屋の前には大木の幹を伐倒してあり。

(六月二十日の午後、伊達政宗は、上の方の岩に腰をかけて、絲の先に蟲をつけたる流し釣にて魚を釣つてゐる。小屋の前にも荒蕪二枚ほどを敷きて、若侍四人が午睡をしてゐる。白石駿河は無言で立つてゐる。玉川久五郎と鹽澤五兵衛は百合の根を洗つてゐる。水の音にまじりて蛙の聲きこゆ。)

玉川。 けふは薄陰りで少しは凌ぎよい。山も深く、谷も深く、定めて涼しからうと思つてゐるが、朝夕は格別、日の中は矢はり暑い。

鹽澤。 底倉は温泉の湧く村と聞いてゐるが、來て見れば凄まじい山川が流れてゐるばかりで、それらしいものも見えぬ。

玉川。 その温泉の湧くところは、これから三四町も上の方ぢやとか云ふわ。なにしろ廣い大きい山ぢやで、土地不案内の我々には些とも勝手が判らぬ。

鹽澤。 先頃まではこの崖の上に三四十軒の人家があつたさうぢやが、この四月のいくさ火にみな焼き拂はれてしまつたと云ふことで、現在こゝらに棲んでゐるものは我々ばかりぢや。

(政宗は舌打して釣竿を投げ出す。その音に二人は見かへる。)

玉川。 殿、釣れませぬか。

政宗。 釣れぬ。半時も水を睨んでゐても、一匹も釣れぬわ。武運が盡きたら小魚にまで侮らるゝか。思へば惨めなものぢや。

玉川。 殿は氣が短いので何うもならぬ。五兵衛、お身が代つて釣つて見やれ。

鹽澤。 何うもこゝらは思はしくないやうぢや。今少し下の方へ行つて釣つて見よう。かうと知つたら釣道具を用意いたしてまゐればよかつたが、眞逆に斯様なことがあらうとも存せぬので……。

政宗。 さうぢや。(冷笑ふやうに。)まかり間違へば腹を切らさるゝか首を斬らるゝかとは覺悟して來たが、まさかに飢殺さるゝとは思はぬのでなう。關白は小田

原の敵を兵糧攻めにするばかりか、味方の我々までも飢殺さうとせらるゝのか。政宗の着到は當月五日、すぐにこの底倉に追ひ込まれて、それから丁度半月になる。住む所もなく、食ふものも無く、政宗主従はどうして生きてゐると思召すぞ。さりこは餘りに無慈悲の仕置ぢや。

玉川。仰せの通り、これが大勢ともあらばこそ、多寡が十人二十人の食糧は如何様にしても得らるゝものと存じて居りましたに、まことに案の外でござりました。

政宗。(木の幹に腰をかける。)底倉といへば湯の湧くところ、定めて相當の人家もあることと存じて居つたに、来て見れば一軒の家もなく、俄作りの小屋を建て僅かに雨露を凌ぐ始末ぢや。まして其の翌朝からは三度の食事にも差支ゆる。いかに我々の命が關白の手の中に握られてゐるとは云ひながら、これほど無慈悲の仕置を受けやうとは、かへすくも心外ぢや。

(白石は無言にて政宗の顔を睨む。玉川は黙して聽いてゐる。)

鹽澤。(政宗に)釣竿を暫時拜借いたしまする。

政宗。おゝ、勝手に持つてゆけ。

(鹽澤は落ちたる釣竿を拾ひ取りて、上の方に去る。玉川は洗ひたる百合を兜の鉢に入れる。)

政宗。(起つ。)若侍どもは好う眠つてゐるな。

玉川。御前をも憚らず斯様の體でござりまする。起しませうか。

政宗。いや、構ふな。斯うしてゐても、何時何事が起らうも知れぬので、毎夜交代で寝ずの番ぢや。若い者は定めて眠たいであらう。まあ、ゆるくと寝かしてやれ。(腰をかける。)この外には壹岐と小十郎、甚三郎、それだけかな。

玉川。まだ外に二人居りまする。

政宗。では、六人減つたか。

玉川。(云ひにくさうに。)はあ。

政宗。この體たらくでは、所詮政宗の運もこれまでぢやと見きはめて、一人去

り、二人去り、思ひく々に逐電したか。

玉川。 何ごも恐れ入つたる儀で、今この際に殿の御運を見かぎつて逐電するな
どとは言語道断、憎い奴原でござりまする。

政宗。 然るべき者ごもを擇り抜いて來たのぢやが、まさかの時には皆これぢや。
矢はり命が惜しいと見ゆるな。いや、命が惜しいばかりでもあるまい。こんな
として生きてゐるのは餘りに腑甲斐ないからなう。

玉川。 (不安らしく)殿。

政宗。 いや、氣づかふな。政宗は決して自滅などはせぬ。その覺悟がなければ、
奥州からわざくこゝまでは出て來られぬ筈ぢや。其方はこゝへ來たのを後悔し
てゐるか。

玉川。 さあ。(躊躇してゐる。)

政宗。 むゝ。(うなづく。)して、駿河はどうぢや。其方も後悔してゐるらしいな。
(白石は無言。)

玉川。 駿河どの。殿のお詞ぢや。

(白石は矢はり無言。)

玉川。 これ、駿河どの。殿のお聲が聞えぬか。

白石。 はて、さうくしい。われらは此の底倉へ追ひ籠められてから、殿と小
十郎には口を利かぬことに決めてゐるのぢや。それはお身達も知つてゐる筈でな
いか。

玉川。 それは我等も知つてゐるが……。

白石。 知つてゐるなら黙つておるやれ。殿も殿なら、小十郎も小十郎ぢや。小
才覺の人間が二人揃うて、到頭こんな事にしてしまつたのぢや。

政宗。 (しづかに。)其方どもは今度のこと初めから不同意であつたな。

白石。 勿論でござるよ。

玉川。 何分不安でござりまして……。

政宗。 其方どもばかりでない。一家中大方は不同意で、誰も彼もしきりに政宗

……小田原陣……

を引き止めて、うかくと關白の膝もとへ參るは虎の口へ這入るやうなものぢやと云うた。成上り者の秀吉めに頭を下けるは、弓矢の恥辱ぢやなどとも申した。

玉川。 まつたく左様に存じました。

政宗。 ところで、來て見るにこれぢや。

白石。 (皮肉らしく)この通りぢや。

政宗。 若い者どもが疝癪を起して、逃けてしまふのも無理はない。政宗もぢつと疝癪を堪へてゐるのぢや。さりとして今更悔んではならぬ。愚痴をいふべき場合でない。

玉川。 はあ。

政宗。 とは云ふものゝ、實はその辛抱がなかく苦しいわ。

白石。 その苦しい辛抱も、お心柄ぢや。いや、われらはもう口を利かぬ筈であつた。

(白石は傍を向いてゐる。下の方の崖路より高野壹岐は家來二人を連れて降

り來り、川中の石を傳うて小屋の前に来る。)

高野。 唯今戻りました。

玉川。 おゝ、御苦勞でござりました。して、野村殿は何と申しました。

高野。 残念ながら斷られた。

玉川。 斷られた。では、糧米の合力はならぬと申しましたか。

高野。 彼の野村彌一右衛門といふ男、もとより前々よりの馴染でもないが、湯本宿にて案内をたのんだが縁となり、なにか御不自由の儀もあらば御遠慮なく申越されいと懇ろに申したれば、今この場合、恥を忍んで糧米の無心に出向いた處、打つて變つた挨拶で、何分にもそれがしは小身、たくはへの食糧とても乏しうござれば、折角ながら御見繼は相成り兼ねますと情もなく斷られた。

玉川。 いかにか小身とて、二百人、三百人の人数を持つたる身の上で、三俵五俵の糧米を見繼がれぬと云ふことはあるまいに、さりとは物惜みする奴でござるなう。